南北朝時代年表 楠公遺物
歴代遺蹟備考

W217
N20

ガラス使用

南北朝時代年表

13.7.24
01W50701

文保二年	三月、後醍醐天皇即位。
元應二年	八月、續千載和歌集成る。
元享元年	是歳、記錄所を復し天皇親ら訴を聽く。
二年	八月、僧師錬元亨釋書を作る。
正中元年	九月、天皇幕府追討を謀り給ふ。 北條高時、日野資朝俊基等を鎌倉に拘す。
二年	八月、高時、資朝を佐渡に流し俊基を釋す。
嘉曆元年	六月、僧圓觀、文觀、勅命により北條高時を呪咀す。
二年	陸奥人藤原季長兵を擧ぐ。
三年	
元德元年	
二年	九月、北畠親房出家す。
元弘元年 （五九六年前）	八月廿四日、是夜天皇神器を奉じ俄に奈良に幸す。
	同　廿七日、天皇奈良を發し笠置山に幸す。
	九月五日、幕府、足利高氏に命じ兵を率ひ西上せしめ、安達高景、二階堂貞藤を遣し新主を立てしむ、即ち**光嚴院**なり。
	同　十四日、楠木正成兵を起し赤坂に據る。
	同　廿六日、大佛貞直、金澤貞冬、足利高氏等笠置に向ふ。
	同　廿八日、幕府軍笠置を陷る、天皇逃れ出給ふ。 幕兵天皇を有王山に要し平等院に奉ず、又萬里小路藤房等を捕ふ。
	十月三日、天皇平等院より六波羅南方に御す、是日尊良親王河内にて捕はれ給ふ。
	同　六　日、天皇劍璽を**光嚴院**に授け給ふ。
	同　十五日、幕兵大擧して赤坂城を圍む、楠木正成善く拒く。
	同　廿一日、赤坂城陷り楠木正成遁れ去る。
	十一月五日、足利高氏幕府の許を受けずに關東へ歸る。
	十二月廿七日、幕府、**光嚴院**に奏して天皇を隱岐に尊良親王を土佐に尊澄法親王を讃岐に遷さんとす。

二年【正慶元】（五九五年前）

正月十七日、是夜天皇竊に六波羅を脱せんとして果し給はず。

三月六日、中宮西園寺氏、天皇の西遷を聞き夜六波羅に詣り別を告給ふ。

同　七日、天皇隱岐に遷幸す、一條行房、千種忠顯及び内侍阿野氏等扈從す。

同　八日車駕昆陽野に宿す、是日尊良親王を土佐に、尊澄法親王を讃岐に、靜尊法親王を但馬に遷す。

高時又皇子恒良、成良等の幼なるを以て之を西園寺公宗等の第に置く、八歳の皇子某天皇を思慕して歌を賦す。

四月一日、車駕出雲八杉津より艤し三尾湊に泊し遂に隱岐に航し給ふ。

是月、幕府花山院師賢を下總に洞院公敏萬里小路季房を下野に同藤房を常陸に流し北畠具行を關東に下す。

六月二日、幕府、日野資朝を佐渡の配所に殺す。

同　四日、大塔宮令旨を熊野山に傳へ力を致さしむ山徒之を幕府方に告ぐ。

同　廿六日、竹原八郎、大塔宮の令旨を奉じ兵を率ゐて伊勢に入る。

八月廿七日、大塔宮、高野山に令して兵を出さしむ僧徒應ぜず、

是月、大塔宮、楠木正成兵を起す、北條高時東國の兵を集め賞を懸けて宮及び正成を捕獲せしむ。

十二月廿八日、大塔宮又令旨を發して高野山の兵を促す、僧徒尙命を奉ぜず。

是月、楠木正成赤坂城を攻む湯淺定佛出て降る。

三年【二年】（五九四年前）

正月五日、楠木正成紀伊人井上、山井等と河内天見に戰ふ。

同　十日、大塔宮令旨を下して粉河寺の僧兵を徵さしむ。

同　十四日、楠木正成河内和泉守護代を擊て之を破る。

同　十九日、六波羅、竹井、有賀二將を遣し四天王寺に城を築く、是月四條隆貞、楠木正成之を攻む。

同　廿一日、赤松則村兵を起し苔繩山に城き官軍に應ず。

同　廿二日、楠木正成兵を收めて葛城に歸る。

同　廿三日、宇都宮公綱四天王寺に至り正成の壘を攻む。

是月、鎌倉の大兵京師に入る。

二月二日、楠木正成の兵吉野執行を擊て之を走らす。

同　五日、大塔宮、令旨を粉河寺僧徒に賜り戰功賞せらる。

同　十九日、北條高時、皇子恒性を越中に遷し之を害し奉る。

同　廿一日、大塔宮令旨を播磨大山寺に賜り兵を率て官軍に會せしむ。

同　廿二日、幕府赤坂城を攻む城兵善く拒く幕兵死傷多し。

同　廿六日、保野彥太郎、藤澤四郎太郎の部兵赤坂城を攻む利あらず。

同　廿七日、幕兵千早、赤坂を攻む、旣にして赤坂陷る。

閏二月一日、吉野城陷る村上義光及子義隆之に死す、大塔宮高野山に走る幕兵力千早城に聚る。

同　十五日、大山寺僧徒、六波羅の兵と小平野兵庫島に戰ふ。

同　廿二日、大塔宮、箕面寺に令して天皇の還幸を禱らしむ。

同　廿四日、天皇潛に隱岐を出て出雲に航し給ふ。

同　廿五日、天皇沙汰浦に到給ふ。

同　廿七日、天皇杵築浦に到給ふ。

同　廿八日、天皇伯耆大坂港に到給ふ、名和長年迎て船上山に奉じ擁衛す。

同　廿九日、佐々木淸高船上山を犯す、名和長年拒て之を却く、山陽、山陰の豪族風を望て天皇に奔附す。

三月五日、幕兵梯を作りて千早城を攻む楠木正成燒て之を拒く。

同　十一日、新田義貞密に朝命を受け病と稱して千早より罷め歸る。

四月十二日、天皇將に京師に還幸あらんとす長年諫めて之を止む。

同　十四日、北條氏の兵千早城を攻む。

同　十六日、幕府、足利高氏、名越高家等をして兵を率て上京せんとす、尊氏潛に使を行在所に遣し歸順を乞ふ是日京都に入る。

同　二十日、幕兵千早城を攻む大塔宮所在の敵を擊て千早の援を爲す。

同　廿七日、足利高氏丹波に入る。

同　廿八日、高氏丹波篠村に在り、遠近の兵來屬す、是月願文を篠村八幡祠に奉じ尋て進て嵯峨に陣す。

五月二日、足利高氏勅命に奉對し王事に勤むるを誓ふ、高氏の長子竹若次子千壽王鎌倉に出奔す竹若害に遇ふ。

同　八日、新田義貞兵を上野に起し進て武藏に入る。

同　十二日、千種忠顯、足利高氏、赤松則村等使を船上に馳せ京師を收復するを奏す、天皇群臣を召して還幸を議す。

同　十四日、北條泰家大軍を率て新田義貞を拒く明日大に分倍河原に戰て敗績し鎌倉震怖す。

同　十七日、勅して**光嚴院**を廢し正慶の年號を改て元弘に復す。

同　十八日、新田義貞の 先鋒大館宗氏稲村崎を破り進み戰て 稲瀬川に死す。義貞の軍遂に極樂寺坂を攻ること數日。

同　廿一日、義貞の軍極樂寺口を破り鎌倉に入る諸口隨て潰ゆ。

同　廿二日、高時以下悉く自盡し北條氏亡ぶ將軍守邦親王薙髮せらる。

同　廿三日、車駕伯耆を發し給ふ。

同　廿五日、新主(光嚴院)を廢して元弘の號を復す。

同　廿六日、車駕千本宿に著し給ふ。

同　廿七日、車駕書寫山に幸す。

同　廿九日、北條高時の子邦時を捕へて之を誅す。

同　三十日、車駕兵庫に著し給ふ。

六月二日、車駕兵庫を發し給ふ、楠木正成迎謁す、鎌倉の捷報至る。

同　四日、車駕東寺に御す。

同　五日、車駕二條富小路殿に還御す。

同　十三日、大塔宮、高氏を圖り給ふ、大塔宮征夷大將軍に補せらる、尊澄法親王、藤房等配所より歸る。

建武元年（五九三年前）

八月五日、北畠顯家、足利高氏、新田義貞、楠木正成、千種忠顯等の功を論するること差あり、高氏名を尊氏と改む。

六月七日、大塔宮、尊氏を攻めんとし給ふ。

十　月、北條氏の餘黨紀伊飯盛山に據る楠木正成等を遣りて之を伐たしむ、

十一月十五日、大塔宮を鎌倉に流す。

二年（五九二年前）

三月一日、尊氏、地を丹波光福寺に寄せて高時等の冥福を祈る。

同　五日、足利直義、石川詮持等に命じて兵を下野に出さしむ。

七月十四日、諏訪賴重父子、北條時行を奉して信濃に起る、小笠原貞宗兵を發して之を伐つ。

同　廿二日、時行武藏に入る直義之を女影原、小手指原等に拒ぎて利あらず、大塔宮を弑し奉り成良親王を奉じて西走す。

同　廿四日、佐竹貞義、北條時行と武藏鶴見に戰ふ。

同　廿五日、北條時行鎌倉に入る。

八月二　日、尊氏自ら東伐せんとし且征夷大將軍總追捕使たらんことを請ひ出發す。

同　十三日、時行の黨陸奥に起る北畠顯家、伊達南部諸氏をして之を長倉城に伐たしむ。

同　十八日、尊氏、時行の兵と大に相摸に戰ひ明日鎌倉に入る、時行逃れ諏訪賴重等自殺す。

十月十五日、中院具光を鎌倉に遣して尊氏を召す、尊氏應ぜず第を幕府の舊址に造る。

十一月二日、足利直義、新田義貞を伐つと稱し將士を徵す。

同　六　日、高師泰等、命を天野經顯に傳へて稲村崎を警固せしむ。

同　十八日、尊氏、奏狀を上りて新田義貞を討たんことを請ふ。

同　十九日、尊良親王、義貞等を遣り尊氏を討たしむ。

同　廿五日、官軍、高師泰と三河矢矧川に戰ひて之を破り遣擊して駿河手越に至る。

ガラス使用

同　廿六日、足利尊氏、直義の官爵を削る。凶徒諸國に蜂起す。

十二月五日、官軍、直義と手越河原に戰ひ之を破る直義退きて箱根に據る。

同　十一日、官軍、尊氏と竹下に直義と箱根に戰ひ十二日佐野山に戰ふ、大友貞載叛きて尊氏に應じ官軍敗績す、尊氏、直義議を決して西上す。

同　廿二日、北畠顯家、義良親王を奉じて陸奥を發し鎌倉に入り遂に尊氏を追ひて西上す。

延元元年【建武三】（五九一年前）

正月一日、千種忠顯、名和長年等勢多を守り直義と戰ふ。

同　七日、楠木正成宇治を守る、畠山高國來り攻む。

同　八日、尊氏攻めて八幡を取り義貞と大渡に戰ふ。

同　十日、脇屋義助等山崎を守る、細川定禪等攻めて之を破り京師に入る、天皇神器を奉じて東坂本に幸す。

同　十一日、尊氏京都に入る。

同　十二日、直義、大友氏泰をして坂本に向はしむ。

同　十六日、尊氏、細川定禪に園城寺を援けしむ、義貞、顯家攻めて破り高師直と闕山に戰ふ、義貞等凶徒を追ひて京都に至る、尊氏、直義之を逆へ戰ひ義貞退きて鹿谷に據る。

同　廿七日、義貞、尊氏と賀茂河原に戰ひ尊氏敗走す義貞又定禪と戰て利あらず兵を引て還る、尊氏復た京都に入る。

同　三十日、官軍、兵を合せて尊氏を糺河原に擊て之を走らす。天皇京都に還し成就護國院に御す。

二月二日、天皇成就護國院より花山院の亭に移御す。

同　三日、尊氏、篠村より兵庫に至る。

同　五日、顯家、義貞等兵を率て京都を發し芥河に至る。

同　十日、正成、尊氏と打出西宮濱に戰ふ夜に及て正成兵を收て退く。

同　十一日、義貞等の諸將、尊氏を豐島河原に討て大に之を敗る、尊氏兵庫に走り竊に人を遣して光嚴上皇の院宣を請はしむ。

同　十二日、是夜尊氏播磨室津に航す。

同　十五日、尊氏防戰の備を定め室津を發し備後鞆に航す、適〻光嚴上皇の院宣を拜受す、乃ち書を大友氏泰に寄せ鎭西に赴くを告げ又小早河景宗をして安藝の官軍を擊しめ尋て安藝貞鑒に令して赤間關に出陣せしむ。

同　二十日、尊氏長門赤間關に達す。

同　廿九日、延元と改元す。尊氏赤間關より筑前葦屋津に達す。

三月二日、菊地武敏、尊氏と多々良濱に戰ひ敗走し尊氏箱崎に陣す。

同　三日、尊氏、書を宇都宮大膳等に與へ出陣を促す。

同　六日、義貞、尊氏追討の命を奉じ發するに臨て病む。

同　十二日、尊氏東上せんとす高師直をして旨を爾寢清成に傳へ船舶を點檢し水手を具備せしむ。

同　三十日、足利直義書を吉河實經に與へて來月三日を以て發軔するを告ぐ。

四月三日、尊氏博多を發して長門府中に達す。

同　廿七日、尊氏、長門府中を發して周防笠戸に達す。

五月一日、尊氏、安藝嚴島に達す。

同　五日、尊氏、備後鞆に達す。

同　八日、磨播鵤庄に陣する數日。

同　十日、尊氏、鞆を發して海陸並び進む。

同　十五日、尊氏、備前兒島に達す。

同　十七日、直義、備中河原に陣し使を尊氏に遣して戰期を約す。

同　廿二日、尊氏兒島を發して室津に泊す、直義も亦掛河に軍す。

同　廿三日、是夜尊氏室津を發し大藏谷の澳に泊す、直義又一谷の西に軍す。義貞退て兵庫に屯す。

ガラス使用

同　廿四日、天皇正成に勅して義貞を援けしむ正成奏する所有り行はれず即日發途。

同　廿五日、義貞、正成等、尊氏と湊河に戰て克たず正成及び弟正季、菊地武吉等之に死す、義貞殘兵を率て歸京す。

同　廿七日、天皇賊を避て再び東坂本に幸す。

是日尊氏、光嚴上皇を迎ふ。

六月五　日、直義の兵行在を犯す官軍雲母坂に戰て千種忠顯之に死す。

同　六　日、高師尙、西坂本を犯す義貞防戰大に賊軍を敗る。

同　十四日、尊氏、**光嚴上皇**を奉じ東寺に入り灌頂堂を以て宮と爲す。

同　二十日、官軍賊を今道越に敗り高師重を斬る賊皆走る、直義退て三條坊門に陣す。

同　三十日、義貞、兵を分ち細川定禪を内野に高師直を法成寺河原に攻め進て東寺に迫る、仁木賴章等善く禦ぎ官軍利あらず長年、三條猪熊に戰死す、義貞苦戰殘兵を收めて叡山に還る。

八月十五日、**法皇**、**上皇**、**豐仁親王**と二條良基の第に幸し親王泉殿に加冠し踐祚の儀を行ふ是を**光明院**となす。

十月九　日、義貞に勅して皇太子及尊良親王を奉じて越前に赴き專軍事を勾當せしむ、尊澄法親王、北畠親房伊勢に走り四條隆資紀伊に逃る。

同　十　日、天皇叡山より還幸し華山院に御す尊氏兵を置て監衞し扈從の諸將士を拘す。

義貞北行の途大雪に遇ひ人馬多く凍死す是月越前敦賀津に達し金崎城に據る。

十一月二日、天皇僞造の神器を**光明院**に傳ふ。

同　十四日、**光明院**、成良親王を立て皇太子と爲す天皇吉野に幸するに及で之を廢す。

同　廿一日、是夜天皇神器を奉じ大和に潛幸す。

延元二年【四年】
（五九〇年前）

正月一　日、高師泰等金崎城を圍む。

同　八　日、北畠顯家、義良親王を奉じ陸奥靈山に據る。

高師泰等金崎城を攻む。

三月五　日、是夜師泰等金崎城を攻め城遂に陷る、皇太子恒良親王執へらる。尊良親王自盡す、義貞杣山に在るを以て免る。

三　年【曆應元】
（五八九年前）

正月二　日、顯家、義良親王を奉じて鎌倉を發し西上す。

同　十二日、顯家遠江橋本に至る。

宗良親王遠江井伊城に在り、顯家に會して西上す。

同　三十日、顯家伊勢に赴く。

五月廿二日、顯家、師直、師冬と堺浦に戰ひ敗死す。

閏七月二日、吉野行宮、數々新田義貞を召す、上途を果さず、是日足利高經と戰て死す。

八月廿八日、北朝曆應と改元す。

是月、尊氏政務を直義に委任す。

九月九　日、伊勢を發したる義良親王等の船遠江洋にて颶風に會し漂流二日、覆沒或は漂着す、親王の船伊勢篠島に歸着し宗良親王は遠江白羽湊に北畠親房は常陸東條浦に着す。

十二月卅日、懷良親王讃岐に航し將に伊豫に渡んとす。

四　年【二年】
（五八八年前）

三　月、義良親王伊勢より吉野に還り皇太子となる。

是春、宗良親王吉野行宮に在り。

四月廿八日、懷良親王讃岐より伊豫に航す。

七月廿二日、宗良親王遠江井伊城に據り給ふ、是月高師泰之を攻む。

八月十五日、天皇位を皇太子に讓る。即新帝を後村上天皇と稱し奉る。

同　十六日、後醍醐天皇の崩御を以て政務を停むること七日。

十月三　日、後村上天皇吉野行宮に即位し給ふ。

同　五　日、**光嚴院**、龜山殿を以て佛寺となし後醍醐天皇の冥福を祈り給ふ。

大楠公に因む展覽會目録

興國元年【三年】
二　年【四年】
五　年【康永三】
正平二年【貞和三】
三　年【四年】
（五七九年前）

十一月廿五日、尊氏、後醍醐天皇百箇日の佛事を修す。
四月廿七日、**光嚴院**、後醍醐天皇御廟の地を關白一條經通に諮詢し給ふ。
五月一　日、親房、興良親王を吉野より迎ふ、是日親王常陸に赴かせらる。
十一月十日、春日顯時興良親王を奉じて大寶城に入り親房關城に走る。
四月十二日、北畠顯信、某親王を奉じ陸奥宇津峯に據る。
八月十　日、楠木正行、和田助氏等を率て紀伊隅田城を攻む。
九月九　日、楠木正行八尾城を攻む。
同　十七日、楠木正行、細川顯氏と河内藤井寺に戰ふ。顯氏敗れ走る尋て教興寺に戰ふ正行夜に乘じて北營を襲ふ敵兵多く死す。
十一月廿六日、楠木正行、山名時氏、細川顯氏を住吉及び天王寺に擊て大に之を破る。
正月二　日、北畠親房興良親王を奉じて軍を和泉に督す、楠木正行、高師直等大軍を率て來ると聞き吉野に詣りて辭訣し後醍醐天皇の陵を拜して發す。
同　五　日、楠木正行、正時、高師直と大に佐良良北四條に戰て之に死す。今上、正行の忠烈を追褒し給ひ從二位を累贈せらる。

ガラス使用

一	小楠公幼時守刀來國俊作	一口	神戸	湊川神社
二	大楠公木像	一軀		同
三	小楠公木像	一軀		同
四	土方久元伯楠公之詩	一幅		同
五	鐵齋筆千早城陣營の圖	同		同
六	東郷元帥書楠社創立			
	御沙汰書中句	同		同
七	相馬九方詩	同		同
八	建仁寺天章老師詩	同		同
九	大楠公佩刀	一口		同
一〇	泣男杉本佐兵衞額面錦繪三枚續一面			同
一一	楠母小楠公を誡むる額面錦繪二枚		同	同
一二	大楠公朝敵征伐起願文摺本	一幅		同
一三	河野鐵兜翁詠楠公詩	同		同
一四	貝原益軒先生楠公墓記	同		同
一五	非理法權天御旗	同		同
一六	楠公著用卯花鎧	一領		同
一七	有栖川熾仁親王御寄進太刀	一口		同
一八	小楠公着用喉輪	一個		同
一九	軍旗　非利天の旗	一流	河内	觀心寺
二〇	楠公所持劍　五郎正宗作	一口		同
二一	小楠公所持劍　村正作	同		同
二二	正儀公所持劍　長光作	同		同
二三	劍袋　大　正成公所持	一個		同
二四	同　小　正行公所持	同		同
二五	小札腹卷　喉輪二個共	一領		同
二六	楠公乘鞍	一具		同
二七	楠公木像	一軀		同
二八	兩楠公肖像　東郷、大山兩元帥贊	双幅		同
二九	小楠公筆蹟寫眞	一枚		同
三〇	觀心寺全景寫眞	同		同
三一	大楠公首塚碑文	一幅		同
三二	小楠公髻塚碑文	同		同
三三	石川柳城楠公詠詩	一幅	河内	楠妣庵
三四	村瀨雪狹筆楠公家訓	同		同
三五	三島中洲楠公詩	同		同

一〇三	楠公に因める錦繪	五九枚	攝津	廣谷誠治郎氏
一〇四	楠公法名軸	一幅	河内	楠文見氏
一〇五	大楠公肖像	同		同
一〇六	小楠公肖像	同		同
一〇七	楠公御胴丸緘糸	一個		同
一〇八	楠公感狀石摺	一幅	兵庫	橋本覺造氏
一〇九	大楠公墨蹟書狀	同	神戸	樹岡與吉氏
一一〇	古本楠公記	廿冊	須磨	村上蒐喜氏
一一一	菊池軍記	十冊		同
一一二	曾我耐軒小傳	一卷		同
一一三	菅茶山七絶	一幅	兵庫	小曾根喜七氏
一一四	水戸烈公藤楠聯句	同		同
一一五	土屋元作著余が見たる福澤先生	一冊		箕輪益夫氏
一一六	楠公墓誌	一幅	大阪	吉田祥三郎氏
一一七	楠公讃辭	一幅		同
一一八	楠正成の訓話	一冊	神戸	滿岡五郎氏
一一九	國體旗解釋	同		同
一二〇	楠家三代精忠錄	同		同
一二一	楠公遺訓注釋	同		同
一二二	楠子遺言竝兵庫卷	同		同
一二三	楠家傳七卷書	七冊		同
一二四	楠正成一卷書	一冊		同
一二五	南木誌	五冊		同
一二六	南木武經	同		同
一二七	金剛寺非理天の書	一幅		同
一二八	樟蔭先生解說軸	同		同
一二九	兒島高德繪畵	同	京都	矢野松玉氏
一三〇	楠公御眞書	同	同	森本太郎太夫氏
一三一	小竹湊川懷古詩	同	兵庫	中谷保二氏
一三二	大槻磐溪楠公詠詩	同	神戸	中野慶次氏
一三三	楠公旗文石摺	同		同
一三四	加藤清平楠公を詠ずる長歌	同		同
一三五	新居帖	四冊	神戸	小島錬之助氏
一三六	蘆陰句選　（完）	一冊	神戸	五十崎夏次郎氏
一三七	芭蕉翁句集	一冊		同
一三八	太平記	二冊		同

ガラス使用

三六	石川柳城楠公夫人詠詩	同		同
三七	三島中洲楠公夫人詩	同		同
三八	大沼枕山小楠公詩	同		同
三九	藤田東湖楠公五百年弔詩	同		同
四〇	土屋鳳洲千早之圖贊	同		同
四一	細川十洲小楠公詩	同		同
四二	日下部鳴鶴大楠公及夫人詩	同		同
四三	三島中洲楠公七絶詩	同		同
四四	八田知紀楠公詠詩	同		同
四五	白隱禪師楠公遺訓書卷	一卷	同	同
四六	小楠公畫像	壹幅		同
四七	楠公像贊	壹幅		同
			河内	楠妣庵 加藤鎮之助氏寄贈品
四八	加藤三樂楠公畫像　高僧讃	一幅		
四九	守勝楠公畫像　林道春贊	一幅		
五〇	富岡鐵齋楠妣庵之圖(寫)	一幅		
五一	平山是則書　大楠公問答錄	一幅		
五二	楠公夫人繪傳圖解	一冊		
五三	同　石版刷	一冊		
五四	山陽先生楠木母の詩　近藤石天書	一幅		
五五	菊水定紋入刀劍	一口		
五六	楠公夫人木像	一軀		
五七	細川十洲筆忠孝橫額	一面		
五八	土屋鳳洲楠公夫人之詩三種	一幅		
五九	後醍醐天皇尊影寫	一幅	兵庫	福嚴寺
六〇	護國松神之銘	同		同
六一	護國松寫眞	二葉		同
六二	蒼官餘韻(前後續)	三冊		同
六三	福嚴寺記	一冊		同
六四	千早城古瓦	一片		同
六五	廣嚴寺古瓦	二片		同
六六	福嚴寺古瓦	同		同
一三九	楠家傳七卷書	五冊		同
一四〇	楠判官金瘡祕記	一冊		同
一四一	日本百將傳一夕話	同		同
一四二	大統歌訓蒙	同		同
一四三	國朝諫諍錄	同		同
一四四	三養雜記	同		同
一四五	菅茶山筆筆のすさび	同		同
一四六	三忠傳	同		同
一四七	其蜩翁草	同		同
一四八	俳諧名所小鏡	同		同
一四九	義烈百人一首	同		同
一五〇	新刻日本百將傳	同		同
一五一	古今武勇歌仙	同		同
一五二	播磨めぐり	同		同
一五三	錦繪修身談	同		同
一五四	正成公奉迎圖型	一個		同
一五五	源光圀卿鷄圖	一幅		同
一五六	攝津名所圖繪	一冊		同
一五七	桃源遺事	一冊		同
一五八	光圀卿書神號	一幅	神戸	津田太郎氏
一五九	楠木神社神木圖	一點	神戸	小林一意氏
一六〇	同　御札	同		同
一六一	楠氏の系圖	一卷	神戸	鹽貝利三氏
一六二	楠公聖駕奉迎の圖容齋書	一幅	神戸	上田周太郎氏
一六三	櫻井驛の圖	同		同
一六四	楠公畫像	一幅	攝津	河野通胤氏
一六五	五言絶句半折	同	同	鹽屋智隆氏
一六六	七言律詩	一幅	攝津	内村九一氏
一六七	山田顯義千劍城七絶	同		同
一六八	乃木將軍詠楠公	同	同	塚田清市氏
一六九	楠公櫻井の書	一冊	同	内村九一氏
一七〇	金剛山戰蹟地圖	一枚	神戸	福原潛次郎氏
一七一	楠公首塚拓本	同		同

六七	蒼官松之遺材	二個		同
六八	小楠公首塚碑文拓本	一幅		同
六九	忠芬義芳	三冊		同
七〇	信夫恕軒楠公詠史	一幅		同
七一	南朝五十七年史	一冊		同
七二	福嚴寺ヱハガキ　一組	一面		同
七三	成覺院佩刀　青山幸利（改葬出棺）	一口	神戸	安養寺
七四	泰源院殿佩刀　青山幸督（改葬出棺）	一口		同
七五	同　棺札	一個		同
七六	安養寺境内圖繪	一枚		同
七七	佛具寄進帳	一冊		同
七八	木函入寶物三十二點（改葬出棺）	一箱		同
七九	楠公軍旗	一旒	大和	信貴山
八〇	楠正成一卷書	一冊	須磨	村上菟喜氏
八一	大平兵庫記　甲、乙	二冊		同
八二	曾我耐軒詩	一幅		同
八三	楠一生記	十二冊	大阪	玉樹芦城氏
八四	楠中將感狀眞蹟	一幅	大阪	日柳孝一氏
八五	楠公父子　櫻井之圖	同	明石	水田慶三郎氏
八六	賴支峰　七言律	同	神戸	中村五兵衛氏
八七	信天翁楠公贊七言詩	一幅		同
八八	大楠公遺書	一通	神戸	箕田周造氏
八九	楠公に關する寫眞	三葉	大阪	伊良子晴洲氏
九〇	硯及水入墨藏	一組	大阪	大野梅翁氏
九一	八幡祈願書遺墨	一幅	神戸	原田逸郎氏
九二	常輝筆楠公掛軸	同	攝津	逢坂昇司氏
九三	後陽成天皇御宸筆	同	神戸	楠辰已氏
九四	正虎公筆卷物	同		同
九五	三重木盃　水戸家贈	一組	攝津	平野利夫氏
九六	平野本治延輝像の軸	一幅		同
九七	南洲翁湊川懷古詩	一幅	神戸	直木政之介氏
九八	正成公軍略の圖	一卷	攝津	松原金藏氏
九九	明極禪師書	一幅	神戸	今井悅太郎氏
一〇〇	守辰筆大楠公の圖	同	神戸	原愛之進氏
一〇一	雪香筆小楠公と其母堂	同	神戸	長谷川雪香氏
一〇二	蒲生君平畫贊三幅對	三幅	大阪	勝本忠兵衛氏
一七二	後醍醐天皇宸筆	一面		同
一七三	光圀卿木像	一軀		同
一七四	千早城古城圖	一枚		同
一七五	金剛山陣地圖	同		同
一七六	河内國圖	同		同
一七七	和泉國圖	同		同
一七八	攝津大繪圖	同		同
一七九	古松軒筆　兵庫圖	一冊		同
一八〇	日本樂府	同		同
一八一	湊川懷古詩	一幅		同
一八二	楠外傳彌生櫻	一冊		同
一八三	木のめ草	同		同
一八四	外史辨妄	同		同
一八五	佩川詩鈔	同		同
一八六	興風集	同		同
一八七	湊川懷古	同		同
一八八	道歌心の策	同		同
一八九	大楠公奮忠事蹟	同		同
一九〇	自筆湊川合戰之圖	一幅	神戸	松村玉年氏
一九一	正成卿畫像集古十種寫	同		同
一九二	賴山陽續湊川帖	一冊	神戸	奥村敬太郎氏
一九三	日柳燕石　菊地溪琴詠楠公父子	双幅		同
一九四	楠氏太刀	一口	攝津	小野武三郎氏
一九五	橋千蔭書　殘菊の歌	一幅		同
一九六	注進狀	一通	神戸	勝部新治氏
一九七	霞亭詩鈔	一冊	神戸	室田英哉氏
一九八	阪正臣筆霞亭楠公廟詩	一幅		同
一九九	楠判官法令	一卷	大阪	辻本篤三氏
二〇〇	同上寫眞	一葉		同
二〇一	大森彥七傳來楠公鎧通	一口	廣島	光禪寺
二〇二	包利作楠公鎧通	同		同
二〇三	濃州兼氏模造楠公鎧通	同		同
二〇四	尊良親王和歌	一枚		同
二〇五	三條實美湊川和歌	一幅		同
二〇六	賴春水自畫贊楠公訣別畫	一幅		同
二〇七	橋本入道榮祐寫經	一卷		同
二〇八	橋本正勝能簡寫經	同		同

二四三	佐々十竹五言詩	一幅	須磨	武岡豐太氏
二四四	日柳燕石詠楠公五言詩	同		同
二四五	水戸楠公五百年祭奠詩	一巻		同
二四六	同　詩歌記錄	一函		同
二四七	浮田一蕙櫻井訣兒圖	一幅		同
二四八	篠崎小竹湊川懷古詩	同		同
二四九	菅茶山楠公墓畔詩畫	双幅		同
二五〇	大楠公首塚碑文原稿	一幅		同
二五一	同　碑文拓文	同		同
二五二	小楠公髻塚碑文原稿	一巻		同
二五三	同　碑文拓本	一幅		同
二五四	嗚呼碑陰文拓本於維新最後作	同		同
二五五	入江九一別母所於楠公碎陰拓本歌		同	同
二五六	探幽畫舜水贊櫻井訣兒圖復製	一面		同
二五七	詠楠公七言詩	一幅		同
二五八	楠一代軍記	三冊		同
二五九	楠家傳	一冊		同
二六〇	日柳燕石詠泣男佐兵衞詩	一幅		同
二六一	湊川軍物語	一冊		同
二六二	寛文年間兵庫名所圖	一巻	神戸	服部一三氏
二六三	加藤雪潭畫 藤田東湖贊　楠公像	一幅	神戸	横田孝史氏
二六四	楠公廟に詣する和歌二首 富岡鐵齋翁	同	越後	丸田尙一郎氏
二六五	三條實美公書祭楠公文	同	大阪	大野良藏氏
二六六	藤橋餘芳元	一帖		同
二六七	鏡五介書狀卷物	一巻		同
二六八	湊川神社誌	一冊		同
二六九	卷菱洲書大楠公壁書	同	明石	松村宗太郎氏
二七〇	太平記脫漏之巻	一巻	大阪	北風喜一郎氏
二七一	鉢割	一口	大阪	古河和一郎氏
二七二	楠公訣別圖	一幅	神戸	福田弘氏
二七三	南北太平記圖繪	十三冊	神戸	三木秀二氏
二七四	國芳筆版畫	三枚		同
二七五	三楠實錄廷尉卷	十二冊	佐賀	楠公會堤淸氏
二七六	江馬天江退享園詩鈔	二冊	神戸	淡海諄一氏

二〇九	大塔宮　牢居經卷	同		同
二一〇	楠公腰刀　無銘	一口		同
二一一	同　夫人守刀　正宗銘	同		同
二一二	德川光圀　俳句	一幅		同
二一三	四方白形兜	一個		同
二一四	高橋兵衞脇指	一口		同
二一五	楠公腹卷用小手	一組		同
二一六	楠公畫幅	一幅		田中善永氏
二一七	同　横物幅	同		松本豐信氏
二一八	白華十稿	四冊	兵庫	神田兵右衞門氏
二一九	旭灣遺藁	一冊		同
二二〇	中井竹山筆懷古八首額	一面		同
二二一	皇朝靖獻遺言	三冊		同
二二二	楠公壁書摺本	一幅	神戸	川島右次氏
二二三	土方久元書謁楠公詞詩	同		同
二二四	首塚燈籠銘摺本	同		同
二二五	湊川懷古歌藤原通房書	同		同
二二六	七生報國語上村大將書	一幅		同
二二七	櫻井訣別圖木版	同		同
二二八	楠中將讃河野鐵兜五絕	同	越後	丸田尙一郎氏
二二九	金剛山要塞地模型	一個	岐阜	建部松三郎氏
二三〇	大楠公御首像自製	同		同
二三一	楠家苗裔過去帳	一冊	兵庫	中村惣太郎氏
二三二	楠家系圖	一枚		同
二三三	大楠公靈碑拓本九度山寺有	一枚	高野山	水原堯榮氏
二三四	湊川神社創立文書	一巻	京都	春日精之助氏
二三五	春日潜菴傳	一冊		同
二三六	潜菴遺稿	一冊		同
二三七	日柳燕石自寫日本外史	廿二冊	大阪	日柳喬氏
二三八	三條西季知詠	一枚	神戸	菅沼ます氏
二三九	大鹽中齋湊川懷古七律詩	一幅		同
二四〇	碑陰文拓本	同	姫路	矢内正夫氏
二四一	舜水朱氏談綺	四冊		岩崎虔氏
二四二	詠楠公七言絕句詩	一幅		同

二七七	先考獄中所記詩歌	一巻		同
二七八	名所繪卷物	一巻	神戸	中村兵吉氏
二七九	名所舊蹟寫眞	廿七枚	大阪	鐵道株式會社
二八〇	寺崎廣業筆楠公父子五月外幟	一揃	東京	樋口繁治氏
二八一	小楠公胴卷		東京	日比勝治氏
二八二	石版『楠公訣兒の處』		東京	前田政敏氏
二八三	同　英國公使パークス碑陰			同
二八四	探幽筆、朱舜水贊櫻井驛訣兒圖入書籍	一冊	東京	前田侯爵家
二八五	月星入獅子文韋（楠正成甲冑革究圖考）	一冊	東京	池田金太郎氏
二八六	楠公像信貴山藏寫	一冊		同
二八七	楠公和歌石淸水藏	一帖		同
二八八	觀心寺大愛童子	一冊		同
二八九	立原杏所楠公畫像會（澤正志贊）	一幅		同
二九〇	緣起畫圖蜀山人舊藏 河內藤井寺緣起 正成文書 楠正成石碑之圖	一帖		同
二九一	社寺略緣起廿三、卅五 和州吉野山金峰寺緣起 楠正成石碑銘圖	二冊		同
二九二	正行文書東堂雜集二	一帖		同
二九三	馬島杏雨筆七言律謁楠公廟	一幅	東京	島田筑波氏
二九四	月岡芳年楠正成（大日本名將鑑）	一枚		同
二九五	齋藤拙堂謁楠中將墓詩	一幅	東京	平井文三氏

ガラス使用

大和路に三十一陵

歴代御陵案内記

寧楽の都は古びて懐古の旅情もはかなしや元明帝外平城七朝（内淳仁は山城）の帝陵はくめども尽きぬ古都情味の物語りに包まれたまゝ、神さびして鎮まります、開化帝の陵は駅近く油坂町山の寺に前方後円、カラタチの玉垣をめぐらす、三宝の奴と称し光明皇后とゝもにサンたる奈良仏教の黄金時代を作り出されし聖武帝のみさゝぎは市の西北郊外小高き上にあり、古は荒れに荒れて怪僧どもの荒らすにまかした事もあつたといふ

◇

元正、元明の二陵その後方の山陵に列び、成務、孝謙（称徳）、平城の三帝陵は郊外西大寺駅西北近くに鼎座し給ふ、そのほとりには平城京の跡、大極殿の遺跡あり、千二百年前の昔をしのぶ一木一草のそよぎにも何人か詩魂動かざらんやだ、西郊の山がかりには垂仁、安康の二陵、遠く嫩草山を一廻りした山越しの日笠村にはしゆん坂二里三十丁の山奥に光仁天皇田原東陵ひそやかに鎮まりおはす、陵は高さ十九尺径二十間の小円ふんでまはりに堀をめぐらしてある、人里離れた山峡の陵にはすでに初雪もこぼれ降りて風寒しとのたよりもある、たい廃せる哀愁みなぎる古都気分に心ゆくまでひたる時間もないが車をかけて転戦するこうこつの閑日月に三笠山に傾く月をみればまた一入の風情であらう

◇

奈良を去つて南下して柳本に崇神景行の二陵あり、楠公父子の血涙の地桜井駅の南鳥見山のふもとを廻つて舒明、崇峻それを終つて畝傍に入ればこゝには神武天皇を初めとして古代の十帝陵が山稜や田畦や森や小川をはさんで神代ながらに鎮まります、付近を流るゝアスカ川の水はかれても国家発祥の霊地はあくまでおごそかにして何事の在はしますかをも知らぬにたれがこの地の石にさへ敬けんの心をわき起さぬ者があらう、今は道路たん／＼として開け、また大坂、京都、奈良よりの電車の便開けて年々に日本のエルサレムは開け行くのである

沢市の哀話で人口にかいしやする壺坂寺の深山近く御所駅をさしはさんで斉明（皇極）孝昭、孝安の三帝陵、吉野電車に乗じ吉野山に向へばまた悲歌、哀歌万こくの物語りを包む後醍醐帝の塔の尾の陵あり——大和路三十一陵には風寒くその初より終りまで参拝選手の夢は包み切れぬ哀愁の旅であらう

仁徳帝の百舌鳥陵

長駆して西のはて、下関に向へば市の東北端阿弥陀寺には安徳帝の御霊代をまつる、寿永の春もとはに我世と思はれしが、信越にはかに雲乱れて、木曽の冠者の一討に、平家のおごり忽ちほろび、史上まれにみる滅亡哀史を負ひ壇の浦海深く沈ませ給ふた八歳の安徳帝の御めい福はこの一堂にまつる、みおろせば軜の早瀬を渡る白浪にさへ記者はひとみをうるますであらう

河内、和泉、摂津、近江にわたる諸陵には今ではこと／＼く大坂から電車、汽車の便自由に通じてゐる、さきに大坂府では皇陵参拝道の改修を企てたゝめいづれの陵もたん／＼たる参道が設けられた

◇

堺東駅の南、泉北郡舳松村に聖帝仁徳帝の百舌鳥耳原中陵はおはす、実に世界最大の御陵である、一名大山陵とも申すほどに総面積実に十四万余坪まるで日比谷公園の三倍にあたる、周囲は実に二十五町余、三重の堀をめぐらした前方後円式のみさゝぎである、その北には反正陵その南には履中陵、摂津一陵は高槻駅にほど近き継体帝の三島藍野陵、転じて大津市の長等山前陵は弘文帝の小円墳なりときく、明治三年明治天皇の勅によつて初めて三十九代の帝位を得られたものである、畏けれど帝は瀬多の戦ひに敗れて長等の山に退いてあはれ二十五の春秋をみづからい死したまふたときく、ビワの水に冬風や渡る、そのさゞなみにも旅情は悲しからん

◇

王子駅、道明寺、下田駅、古市駅——その畔に散在する河内十二陵、和泉三陵にはともに仲哀、応神、雄略、清寧、顕宗、仁賢、武烈等上古の諸帝鎮まりたまふ、たゞ大坂府河内郡川上村檜尾の深山には後醍醐帝第七の皇子にしてそ

皇統こゝに百二十四代——内九十八代長慶天皇の御陵のみはまだいづくとも決定せず、それに斉明（皇極）と孝謙（称徳）の二帝が重祚におはす処から皇陵すべて百二十陵、その大多数は山城（京都付近）大和（奈良付近）に集団してゐる、今参拝に先だつてその概略の案内記を書いてみよう

ガラス使用

の全生がいを南朝回復の苦闘に終らせられた義貞親王即ち九十七代後村上陵の檜尾陵あり、古きこけむす石さくにかこまれた見るもはかなき小円墳ときくだに哀愁は深い、吉野山をくだつてもうずる身には再び観心寺を漏るゝ観経の声にさへそゞろ追憶の深きものがあらう

◇

多摩の御陵はかきつゞるにも及ばぬ、昭和の民草にはあまりに新たなる記憶にして……。

一千年の古都

桓武帝奠都以来明治に至る盛衰実に一千年の都、山紫水明をほこる京都を中心に、洛南に六ケ所十八陵、東山のふもとに十ケ所廿六陵洛西嵯峨のほとりから御室の一帯に七ケ所十九陵、京をはなれて七里の北丹波山国に一陵、大原に一陵、西南天王山のそばに二陵――と六十八帝陵がまします、京都一千年の都、時に外戚の専権あり、時には武家の暴逆あり、兵人のちまたと化すること数次、また平安

室町両朝の文化もあればその半面に、御所の疲弊その極に達し畏れ多くも御手元御不如意をなげかせらるゝ御代もあつた、従つて帝陵も奈良時代のそれに比すべくもない一宇の中、御同域にましますもの、老樹数株にまもられるのみの御陵など拝するだに恐くに堪へぬ御陵が多い

◇

明治大帝の神鎮まります伏見桃山の御陵は申すもかしこし、御陵一帯はもと伏見城跡、今の桃山陵の北方は本丸の跡である、この城跡の間を縫ふて北すること十町、桓武帝陵に達する、奈良の都より平安の地に奠都遊ばされたのは帝が新政を布かんとの大御心からであつた

◇

こゝから一里の東、藤原時代の藝術をほこり、豊太閤一代の栄華の跡を物語るダイゴ村三宝院の裏山がある、北に接して醍醐天皇陵に朱雀陵、二陵ともきゆう陵をなさず朱雀陵は数株の杉の老樹が繁つてゐるのみ、伏見の東郊外竹田村に白河、鳥羽、近衛の三帝陵が相並んで拝することが出来る、付近一帯は白河帝の創営にかゝる鳥羽離宮の跡で、今もなほ当時をしのぶ古瓦を見出すことが出来る、三陵とも多宝塔にまします

◇

深草には仁明帝陵と後深草帝以来十帝の神霊[illegible]同殿にまします深草北陵がある、深草北陵の法華堂にいづれも仙骨を奉安し奉つたもので当時の御朝廷の御手元がいかに御なげかはしい有様であつたかは想像するだにかしこき極みである、更に北して二十町泉涌寺のほとり孝明帝陵をはじめ、仲恭陵、四条天皇の日輪陵、徳川十五代の間の十三帝陵しづまります、月輪陵、後堀河の観音寺陵が一圓となつて程遠からぬところ四ケ所にまします

◇

東山科の里には人皇三十八代の天智帝陵がある、上円下方の御塚で高さ三十四尺、最下壇は四十六里四方といふ桃山御陵に似た大きな御陵である

◇

京都から北に三里、大原女と八瀬の童子に知らるゝ大原に後鳥羽、順徳の二帝陵がある、両帝とも御一代は悲史哀史でつゞられてゐる後鳥羽帝は北条氏のために隠岐の果てに遷幸、順徳帝は絶海の孤島佐渡眞野山に崩ぜられ御仙骨をこゝにうつしまゐらせたものである

乙班
多摩陵へ

午前六時四十九分八王子駅へ降りて甲州街道一里余を矢の如く多摩御陵へ参拝した、武藤八王子市長、青年團員等の出迎へを受ける、畏けれど参道入口から十三町、玉川砂利に清められた、たんたる表参道を余の自動車は鉄砲玉のやうに驅けり行く、総門左側の多摩勤番所へかけつけたのは七時、尾崎守部に**証明を**うけた、四寸角程の陵印をベタリと押してもらふ、なほ進んで陵前へ五町、所定の位置について遥かに仰ぎおもむろに伏して玄宮のあたりおろがみ奉れば、かしこしや、さゞれ石もてふける半月型の玄宮は松のみどりの間にほのみえて折からこぼれくる朝の光りにイブシ銀の如く輝きわたる、霜の白き松の青き相映ゆるその色こそ神国日本の色ではないか、黒白のクジラ幕に**朝風の**そよぐ、砂利を踏む音、御手洗の水のこぼれて落つる忍びやかさ――昭和の世、昭和の人々にとつて国をあげての悲しみを葬りし御陵は御一周年祭を終らせられてけふは早や十日、今にしてこゝを思へば神代ながらの厳かなる存在とならせられた、多摩下長房の山陵や、高尾の山々や、森や、田や林や、浅川の流れや、折からかゞやきいでた日出づる国の太陽に**金色に**はえたその一時……余はいつまでも時間の過ぐるのを知らなかつた『後十分だ』支局の杉村君が叫んだ『よし』甲州街道をまたヒタ走り午前七時二十五分新宿行に投じてホッと息をつけば三十五分間、参拝の早業であつた、車窓遥かに雪につゝまれた富士の高ねが山色新たなる山容をみせて笑つてゐる、新宿へつくと今度は東京駅へかけつけて九時三十分下関行に投じ長驅して西に向ふ

安徳帝御陵

長驅して西の果下関阿弥陀寺の陵についたのは五日朝九時、監守松浦敬一氏、森山本社門司支局長等の出迎へを受け、直ちに平家没落の地壇の浦に向ふ、御裳川の橋上に立つて**悲しき海**を臨めば早鞆の瀬戸は黒くして矢の如く流れ去る、空低く飛雪落花の如く乱れ降る、カモメ飛び、舟の行くさへはかなし、阿弥陀寺の陵は下関市の東北端二十四町赤間宮の境内にあり、たゞわづかにヒトツバにかこまれた二間余の円ふんにて眞中に松一つを植ゑてある、正面のトビラを開いておろがみまつる**身に雪し**きりにそゝぐ、轉じて宗盛、二位尼等平家十三人の墓を展ずればコケむして二尺あまりの青石を前後二列にならべたるにツバキの花ほろ／＼と散り松風の音あはれを傳へてこゝに七百余年前寿永の春浅くその最後を海に投げ給ふた八歳の天子の御上をしのび奉れば去る能はざるものがある、十時十分発大坂へ向つた

伊勢大廟

五日神路山の夜のとばりは静かに明けた、神都山田の町に在す外宮の森の老樹の頂きには、朝日が微光を投げてゐる、この朝宇仁館ホテル好意の勝グリに先幸を祝ひ、午前六時半自動車を驅つて出発する、掃清められた**神都の**朝のすが／＼しさ、都塵のなかでは思ひも及ばぬすが／＼しさである、七時になるのを待つて外宮参拝の証明をもらひ、たん／＼五十町の御幸街道を東すること十数分、内宮宇治橋の前に着く、五十鈴川の流れゝみ、神代ながらの神代杉の御神域には朝もや深くたちこめてゐる、今しも朝熊山の頂きから初春の**日の光**は投げられてゐる、朝まだきから相次ぐ参拝の群れと共に、眞白き玉砂利を踏み霜おく宇治橋を渡り御神域に参拝[illegible]の第一歩をこゝに印した、そゞろ神厳の気俗身にしみわたるを覚え、げにも皇室の宗廟帝国の大祖である、身も心もこの荘厳さにつゝまれ一二宮の大前に**額づく**時に午前七時廿二分、カヤブキの御屋根の上の千木、鰹木に照りかへる朝日影の神々しさ、百万の赤子にかはつて国運の隆盛を祈願して大前を辞した、諒闇は明け昭和の大典の年であるといふので新年参拝者は前年に比して三割の増加で三日間十三万人を数へた、東京の御遷宮を前に宇治橋は架け換工事に始めてゐるため仮橋の上に立ちて記念の撮影をして直ちに**神路山**田駅へ驅けつけ八時卅五分の列車に乗じ伏見桃山に向ふ、午後からは洛南一帯六ケ所十八陵に参拝の予定である

十八御陵

冬の日には珍らしいなごやかな陽を東窓にうけ、伊勢路から伊賀へ、平和な村里、山間をぬひつゝ列車は一路桃山に向つて進む、木津川の清流に望んでそびえ立つ笠置

置山を窓近く見て悲壮な南朝史の遺跡をしのび、木津駅で京都行に乗り換へて藤原氏栄華の跡「木がくれに茶つみもきくやほとゝぎす」と芭蕉の句に有名な宇治をすぎて二時十八分桃山駅頭に降り立つ、駅長を初め支局員、読者諸君の熱誠なる歓迎を受け、直に

自動車に

て桃山御陵に向ふ、勤番所には御陵守部が余の参拝を手ぐすね引いて待ち構へてゐた、直に明治大帝の英霊鎮もります御陵前に参拝する、時に二時半、御陵のほとりは松の緑いよゝ濃く、眞白きさゞれ石の玄宮を拝するも畏き極みである、二百卅段の石段を登り南を見れば宇治川、オクラ池を望み、その広く大なる眼界はたゞ驚くばかりで、御陵は上下三段に分れ、上円下方の御塚で円基の高さ廿一尺、御拝所からの総高さ六十六尺、周囲三方は石垣をめぐらし、前面は二重の石の玉垣である、御陵地一帯は豊臣秀吉の桃山城の跡、この間を抜け下に約十町、右手に桓武帝陵がある、松杉の茂る御陵域の規模はあまり大きくはない、午後三時自動車にて御陵の裏桃山城の大通りを抜けて六地蔵に出で、太閤花見街道を北東へ約二里ダイゴ村に出で醍醐寺の前を右に十五分の後、人家の間に

朱雀帝陵

を拝す、西野陵墓守長わざ〳〵陵前に出迎へられ、陵域は平地でわづかに千三百余坪、兆域と周囲一丈一尺の大カシ、数本の杉の木がたゞにそびえてゐるばかりで、昔ながらの御陵を拝される、こゝから北へ四町、人家の間を抜けた竹やぶのほとりに醍醐帝陵がある、昔は東西八町、南北十町の御陵であつたのが今は狭められ、平地に穴を掘り祭葬し奉つたもので、陵の上には卒塔婆が立つてゐたといはれてゐる、付近には傳説の地が多い、こゝから山科街道に出で数町にして小町で知られる小野の里勧修寺前から左へ林の中を進み、途中宇多帝の皇后小野の陵を車中で拝し行くと一里余、その昔藤原俊成が「夕ざれば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」とよんだ

仁明帝の

御陵がある石の玉垣を廻らし、杉の大木生ひ茂つてゐる「東海道線に沿うた場所から外国人が通る度に見すぼらしい御陵であると思はれてはならないといふのでこんなにしたのです」と守部は語つた、こゝは桓武帝陵から約十町の下方に位し、こゝから西北に三町奈良線・沿ふて深草の北の陵がある、俗に深草の十二帝陵といはれ、小ぢんまりとした法華堂で、後深草、伏見、後伏見、後小松、称光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成外北朝の後光厳、後円融二帝を葬り申してある、当時宮中は御不如意の関係から

一帝一陵

とされず畏くも御一緒におはすわけである、伏見町に来て武田村に白河帝、鳥羽帝、近衛帝の三御陵を拝す、白河帝のほとりは城南離宮の跡である、白河帝陵は八間半四方の低い御塚、こゝから東に二町鳥羽帝御勅願の下向不動の前を行けば鳥羽帝がおはします法華堂がある、この御陵のすぐ側に近衛帝の御陵がある、皇族中の最古の唯一の木造建築の二重の多宝塔で、慶長元年の大地震に崩壊したのを豊臣秀頼が再建し、塔の高さ九十四尺、内陣には阿弥陀如来、外陣には大日如来の本像を奉安してある、初めこの御陵は

鳥羽帝の

皇后美福門院の御所とするはずであつたが、皇子近衛帝が早逝遊ばされた為こゝに祭葬申し上げたものである、こゝで一先づ打ち切る豫定であつたが、まだ時間があり仲恭陵を志し稲荷町に驅けつけたが既に遅く怨みをのんで一先づ京都に入つた、この日午後のコースはざつと五里半、自動車で約三時間半、参拝の御陵は左記十八陵

桃山陵二時三〇分▲柏原陵同五〇分▲朱雀帝陵三時一七分▲醍醐帝陵同三五分▲仁明帝陵四時▲深草北陵（十帝陵）四時一五分▲白河帝陵同三〇分▲鳥羽帝陵同四五分▲近衛帝陵同五八分

長驅下関に安徳帝陵を参拝直に大坂にとつてかへし五日午後十時卅三分着駅、駅長始め大坂参陵会員、青年團員、市民多数の出迎へを受け万歳声裏に自動車を上本町に飛ばし奈良行電車に投ず、甲[illegible]山本記者既に大宰の御陵を参拝した

情報を聞

いて心おどる、深更十二時近く余は奈良にたどり着いた、古都死せるが如く眠る、星二つ三つ、寒月三笠山上に傾きて旅情既に深し、開化帝鎮まります、油坂町前の宿舎に出発以来初めてしばしの旅装をとく、また宿を飛び出して開化陵々墓守長桑原氏の門をたゝき奈良市内外十帝陵に関する

参拝順路

の秘策を受く、大和路雪深く風寒しとか、六日早朝から大和三十一帝陵を一気に参拝せんと計画する余の志、なるかならぬかうたゝはんそくして夢結ぼれず思へば四日スタートしてこゝに四十三時間で記者の行程千百四十マイル参拝わづかに二帝陵

畝傍陵

六日午前中は死力をつくして雪と戦ひつゝ参拝をつゞけたが午後に至つて空は全く晴れ春の光うらゝかに大和平原を照らす、この機に乗じてナラサカの元明帝陵を午後零時五十分参拝したのを初め、元正、聖武陵を走るが如くに詣で、歌姫の近く佐紀に出て平城、成務、称德三帝陵、西大寺の南垂仁、安康二帝陵を参拝、午後三時

奈良を去

つて一路柳本に出で崇神天皇、景行天皇の二帝陵に参拝したのは四時近くで雪なほあぜ道、桑畑等に残りて夕陽西山に入り広漠として千二百年前奈良七代の夢をつゝむ平原にもようやく暮れそめて紫色にいろどられゆく……櫻井駅に車を飛ばせて忍坂の舒明帝倉梯の崇峻天皇陵に詣でる頃陽は全く暮れてしまつた、締切時間までに三十分しかない、心せくことおびたゞしい、櫻井より畝傍街道の暗を矢の如くとばして午後五時五十分初めて日本国発祥の地

神武天皇

の御陵に詣で、白雪清く山道を浄化してくれはてた空には正面に天のかぐ山、左に耳鳴山、右には畝傍山の大和の三山墨絵の如く浮ぶ、御陵の砂も雪の白きと相映え、折柄十四日の月雲を破りて神々しく森厳の気全くいはん方なし、選手の来るのを待ちわびてゐた川村陵墓監、多根井、河井、三守長等から直ちに証明を得、破格のお許しを以て余は陵前鉄扉のほとりまで進み恭しく拝み奉つた、松柏の奥の方に消えゆくばかりにゆかしく左右にともしび見えて静かにまたゝく、二千五百八十八年の星霜を渝りなくもたゞふるえて照らすものか……

事務室に

かへれば正月神前に捧げられたスルメ神酒を特に賜はつて余の前途を祝せられた、出てゆく橿原神宮のほとり寒気身にしむ、小さき胸インスピレーションを感じた、私は午後九時こゝを去つてなほ雪深き吉野山に向つた

後花園陵

村上帝陵

洛東十一ヶ所二十八陵の参拝を豫定より約三時間早く終つたのですつかり元気づいて午後の行動に移る、仲恭天皇御陵に参拝、直ちに北野に向つて京都の町を横ぎり、北野神社脇から大將軍前に出て一路周山街道を丹波国山国村の

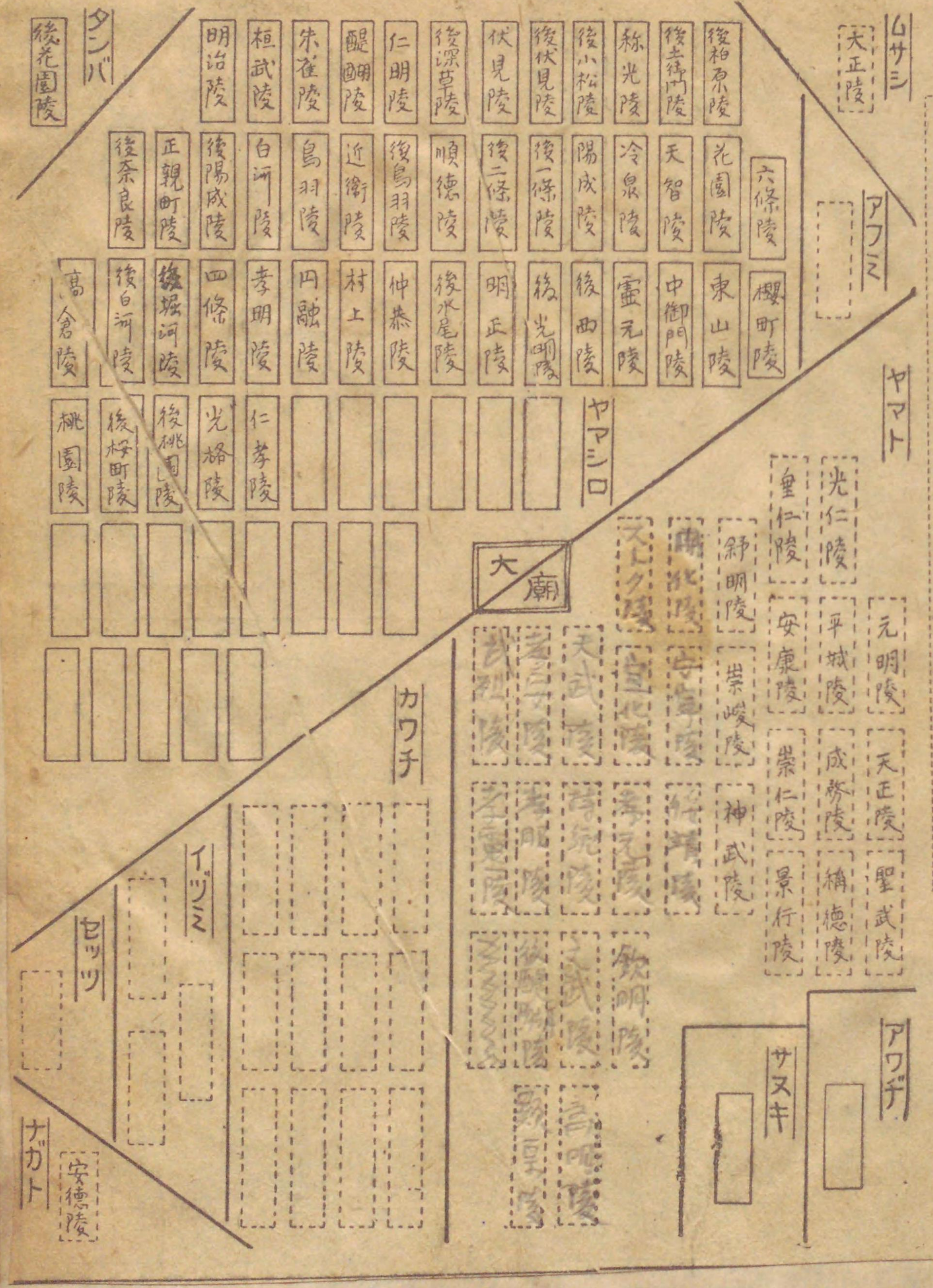
後花園陵

に向ふ、途中この街道に沿うて光孝帝陵等がある、雪深しと傳へられ、七里半の山路は陽のあるうち行かねばと自動車を走らす、京都郊外第一の絶景、秋の紅葉の名所嵐山の冬景色を目のあたりに見る、路をさしはさんで両側にそびえ立つ連山を割つて流るゝ清滝川の清流、この辺りまさに仙境といはれてゐる、マチノを過ぐる頃から寒冷ようやく身にしみ、道はいよ〳〵急、しかも残雪に凍りつきカーブする度に自動車はすべり、標高四十七メートル笠峠を乗りきるあたり、行く手に丹波の空は灰色の雪に包まれてゐる、更に栗尾峠のつゞら折りの

山路を登

る頃には雪さへちらつく、しかも山の端を切り堀られた断がいである、車窓から下は底さへ見えぬ谷である、肝を冷すこと幾度か知れぬ、関東における箱根越などゝはくらべることもできない、かうした難行をつゞけること約一時間半、ようやく周山の町についた、こゝから更に三里ハザマ峠を越えて山国の御陵に着、こゝで車をすてゝ左手の山

ガラス使用


ムサシ
大正陵
後柏原陵
後土御門陵
称光陵
後小松陵
後伏見陵
伏見陵
後深草陵
仁明陵
醍醐陵
朱雀陵
桓武陵
明治陵
タンバ
後花園陵
六條陵
花園陵
天智陵
冷泉陵
陽成陵
後一條陵
後二條陵
順徳陵
後鳥羽陵
近衛陵
鳥羽陵
白河陵
後陽成陵
正親町陵
後奈良陵
アフミ
櫻町陵
東山陵
中御門陵
霊元陵
後西陵
後光明陵
明正陵
後水尾陵
仲恭陵
村上陵
円融陵
孝明陵
四條陵
後堀河陵
後白河陵
高倉陵
ヤマト
ヤマシロ
仁孝陵
光格陵
後桃園陵
後桜町陵
桃園陵
大廟
光仁陵
垂仁陵
欽明陵
安康陵
平城陵
元明陵
崇峻陵
成務陵
神武陵
景行陵
綏徳陵
聖武陵
天武陵
宣化陵
安寧陵
カワチ
イヅミ
セッツ
ナガト
安徳陵
アワヂ
サヌキ

両班御陵参拝の跡＝点線は乙班

間に見える常照寺さしてたんぼ道を走る、御花園陵はこの常照寺境内にましますのである、雪はますゝ強く降りしきり、真白になつて走る、付近一帯は前日来の雪いまだ消えさらず

山門から

中はふみにぢられぬ五寸余の雪がそのまゝに残つてゐる、藤野陵墓守長がわざわざ出迎へられる、御陵は常照寺の裏山にあつて、陵の周囲六十七間、北朝の光厳法王、土御門天皇の御分骨所と御同一である、美しい雪が陵の上をおほふてゐるのも全く神々しい、御花園帝は應仁の乱に泉涌寺も兵火にかゝり、その為常照寺の春岳和尚がお骨を奉じてこゝに葬り奉つたものである、御陵の表には宝篋塔二基が建てられてある、常照寺の境内にはそのほかに光厳法王の御木像、お手植のマキ、御自愛の九重櫻、菅公の髪等が奉安してある古風なお寺である、午後三時二十分御陵を辞して帰路につく、参拝中こゝが

最も難路

であつたのを順序よく運んだのでさらに帰路を急ぐ、丹波の冬の陽は暮るゝに早く、高尾に差かゝつた頃すでに薄暮を感じつゝも周山街道にそひ円融、村上両御陵に参拝の腹をきめる、入口前についたのは午後五時四十五分、後の十五分にと思つて駆け足で入口から先づ一町左にまします円融帝陵に参拝する、十五夜の月は山の端にのぼり、月明に照らされて東面せる御陵の神々しさ、おのづから頭が下る、それから登り三町山上に

村上帝陵

がましますのの明りをたよりに森かげをかけ上り、ようやくにて参拝した、あと二分で定刻になる所であつた、村上陵も兆域の周囲八十間で、円ふんの背後には卅坪ほどの池がある、伊勢戸守部の話しでは十余年来一度も水がかれたことがなく、常に三尺の深さで青々としてゐると、御陵のそばから東をみれば京の町々のあかりが明るく美しい、こゝで一先づ今日の参拝をへて京都に帰る

光仁帝陵

六日大和路三十陵の参拝の旅は折悪しく夜中からの雪に悩み全く余のコースははゞまれて起き抜けに先づ開化陵にもうで直に大和の最大難所なる添上郡田原村字日笠なる奥山に鎮まりますく光仁天皇の御陵に

決死的の

冒険を遂行すべく自動車を走らして飛雪ふんぷんとして寒気りん烈、案内書には二里三十町とあり大したところではないと思つてゐたが全く予想はづれて小砂利と泥ねいの細道を雪にこほりついて車はあへぎあへぎ登つて行く、春日山の山ろくにかゝれば吹きくる吹雪猛烈に襲ひ来る右は千じんの谷左は切立びよう風岩、つゞら織に車上の記者及び吉村写真班員は木の葉の如くもみにもまれて生きた心地もせず、進むこと二里、石切峠の難所で自動車動かずつひに雪中

強行軍に

移る、息きれて進まず折柄、通り掛かりの荷馬車に便乗やつと日笠につく太古の如き風俗をした村人は参拝記者と見て歓呼する、あぜ道を廿町霊前に達す時に九時半、御陵は高さ十九尺四寸あまりにさびしく人里離れた山奥にもうづる人はなく中西守部の署名を得て引返して

奈良に入

れば正午近し、なつかしき東大寺、三笠山はあまりにあはたゞしく過ぎて心やるせなさ、六日中に大和全部を巡拝せんとした最初の計画は雪のため大変化を生ずるに至つた

京都に一夜を明かした余は六日午前六時旅館を出で

本社旗を

立てた自動車で洛北大原村にある後鳥羽、順徳両帝陵に正七時参拝し、更に七時五十分市内北白川の後二条、八時四分には後一条、同十八分陽成、同四十五分冷泉、九時八分市外山科の天智、九時三十二分花園、同五十分清閑寺、六条、高倉、十時十八分後白河、同三十分月輪着後、堀河、四条両帝陵を初め光明帝の十五御陵に参拝し十一時二十五分仲恭陵に参拝した、それより

自動車で

府下御陵中最もへんぴの地にある山国村の後花園帝陵に向つた、同地方は数日前から降り続いてゐた雪も六日に

はすつかり晴れこれがためコースは豫想外にどん／＼進んでゆく、翌日の豫定である洛西の御陵もけふ中に参拝することが出来る見込みである

西の諸陵

水尾陵

山また山の奥丹波の山国村に鎮まります後花園帝に前日は雪中の強行軍を行ひ百二十マイルを突破してさすがにいさゝかの疲れを覚えたが、勇を鼓して七日午前六時早くも

本社旗を かざした自動車は一路暁の霜を蹴つて嵯峨に向ふ、水尾陵に参拝を志した、嵯峨王朝の遺跡に富み一木一石皆跡でないものはないが、急ぎに急いで愛宕神社の一の鳥居で自動車を捨て、こゝから一里半にあまる所は徒歩せねばならない、この間は自転車すらも通はない難路であるが聞きしにまさる険悪な山路で前途を急ぐ身にもかなりの苦労であつた、途中の橋上霜の上にたつて今の先に通つた猪の足跡あるを見てぞつとした、ようやくにして参拝をすまし引返すや天竜寺

大覚寺の 諸陵及びらく西の諸陵をこと／＼く参拝し午後三時には全部を終つて四時二十分京都駅発列車で向日町に向ふ豫定で、この日も天気に恵まれて嵯峨あたりは風はつめたかつたが春のやうならゝかさである、本日参拝を終つたもの左の如し

△午前八時四十五分水尾陵△十二時五分後亀山陵△同三十分後嵯峨、亀山

吉野山の後醍醐陵

吉野山にて夜行してたどりついたのは六日夜十一時、月は昼の如くかゞやいて満山の雪は花の如く山気は櫻のこずゑを壓して重い、さこ屋旅館の主人大村氏及後醍醐陵の平木守部来つてしきりに南朝の故 説いてくれ一人嵐の中を南朝

皇居の跡 吉水神社の谷を下つたきざはしは凍てつき、剣の如きつらゝは暗に光つてゐる「花に寝てよしや吉野の吉水の」と後醍醐帝が詠じられた岩清水の流れは、今も千古の恨みに泣き、月と雪と嵐の吉野の冬は訪ふ人もなくさびて懐古の情殊に深きものがある、明けて七日は朝七時

宿を出で 往復一里半の雪をついて中の千本に道をとり後醍醐帝の御陵に詣でた、雪はいよ／＼深く五寸余に達し櫻はこと／＼く落ちて針の如きつらゝをつけて四月の花と美しさを競つてゐる、幾度か岩角に靴を踏みはづしてはあえぎ／＼ようやくに如意輪堂の山門に達した、空はさらに荒れて全山のこずゑはみな鳴つてゐる、

御遺志を 奉じてこゝ御陵は ばかり北面してゐる、古松老柏天を摩し折柄の嵐に打騒いで悲歌を奏するとき十段の石段を上つて陵殿に至ればこけむす石のとびらにも涙しきりにさそはれる、山上に立つてふり返れば蔵王堂の朱の山門は雪に光り、吉水神社の森は真つ黒く静御前のまへる

振袖山の こずゑ黒く遥かに摂河泉の山々にあかねさしてゐる、これより二里余の山道を馳け下つてムタ駅に出て再び日本のエルサレム畝傍に入り午後は河内和泉の諸陵に旅程を進めた

大和三十一帝陵

吉野の御陵に悲涙をしぼつた余は再び畝傍に出て先づ綏靖、懿徳、安寧、宣化、孝元、天武、持統、欽明、文武の八帝陵を参拝し時既に二時に至つたが、泥ねい深き山路には車意の如く動かず、暮れやすき冬の陽は

雪もよひ の空低くたれてまたはら／＼と氷雨さへ降る始末に、あぜ道や人家の庭傳ひに走り廻つて参拝を急げども日は刻々に暮れてゆく、三百尺の峰にそびえ立つ斎明帝の御陵から百二十階の石段を馳け降り、御所駅をはさんでおはす孝安、孝昭の二帝陵に参る頃は金剛、葛城の山おろし雪をふくんで襲ひ来り手も足も凍らんばかり、連日の転戦に心身全くつかれて綿の如し、やつと午後四時に至り孝昭陵の参拝を済まし行程五里の

逢寺街道 をめちやめちやに走りて顕宗、武烈、孝霊陵に至る頃日全く暮れ如何ともいたしがたい、かゝるうちにも十五夜の月盆の如く東の空にかゝり真昼の如く照らす、これにようやく力を得て車を捨てとぼ／＼と三帝陵に詣で、月の光を頼りにして証明をうけ、孝霊帝陵に馳けつけたのは五時五十九分、こゝにはじめて大和の三十一陵を終るに至つた、甲班山本選手の行動や如何

余の計画 は全く一日をそこし八日には河内、和泉をまはりなほ摂津、近江を残す、日暮れて途の遠きを歎き、疲れ切つた身を引ずつてやつと御所の宿に引揚げるのであつた

宇多帝

洛西十七御陵参拝の豫定は完全に終へた、山崎からほど近い金ケ原御陵へもその日のうちにお参りしようと思つたが

雪に拒ま れて果さなかつた、清和帝の御陵から嵯峨への途中、百人一首で名高い小倉山のふもとなる後亀山帝陵を拝す、昨年五百年祭を終へさせられた御陵、石御塔を中心に四角に輪塔が建てられ、側には五百年の往時を語る老杉が五本こんもりとしてゐる、こゝから

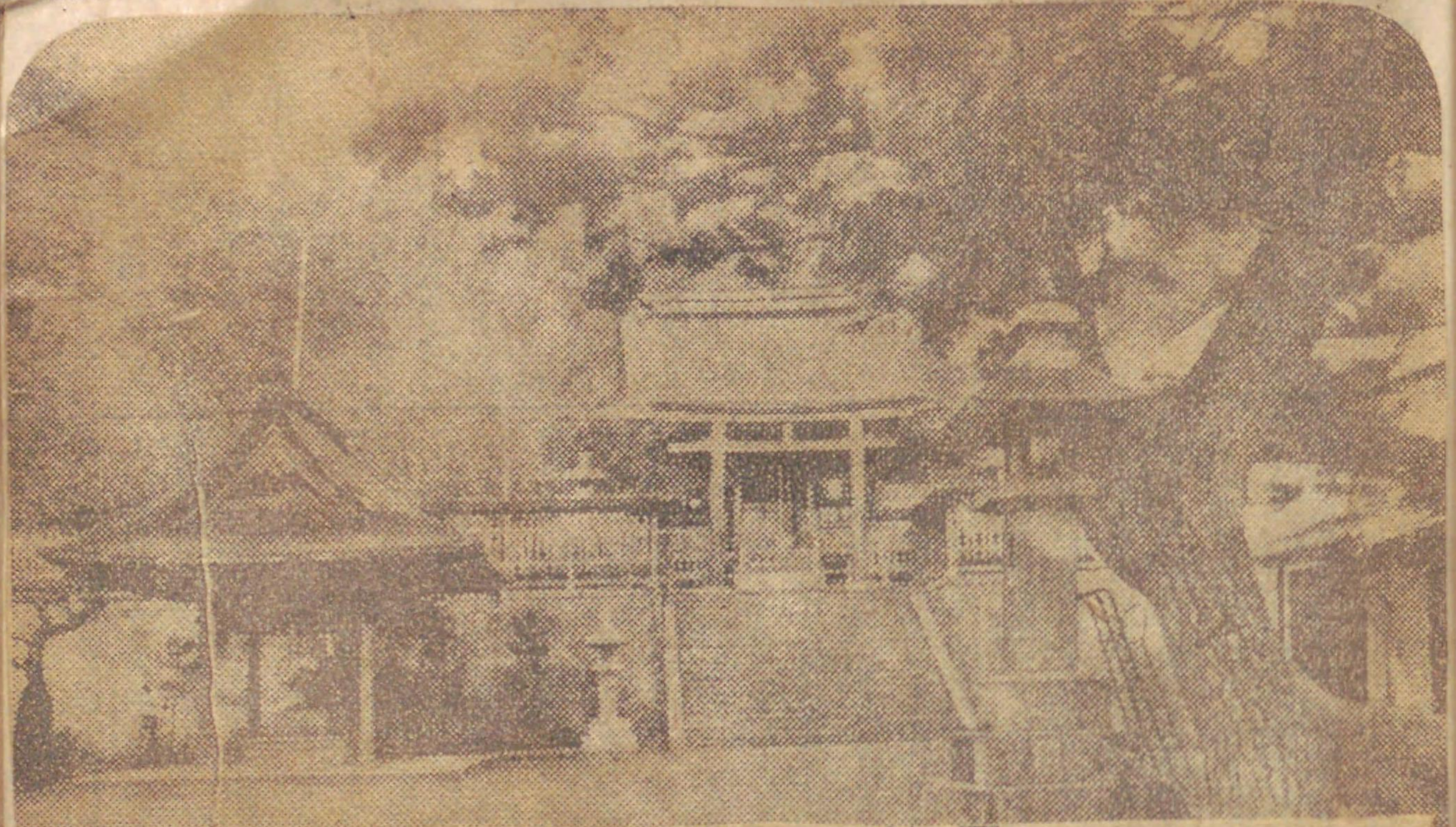
嵐山のほ とり天竜寺の境内に入る、境内には亀山帝陵、後嵯峨帝陵が御同一にまします、双方とも二間四方の法華堂である、亀山帝は元冦の役に宮崎八幡宮に御祈願になつた御帝である、丁度参拝の時、寺の境内で弥次喜多、彰義隊のロケーションをやつてゐたのには少々意外の感に打たれた、後嵯峨帝陵に向ふ、この間約十五町であるが、陵道六町は

松の枯葉 に敷詰められた上り道で相当に歩行困難である、眼下に嵯峨御所の外大覚寺並びに御庭池にして我国でたつた一つの遺跡記念物大沢池が青々としてゐる、大覚寺は後亀山帝が後小松帝に三種の神器を授けられて六十年にわたる南北両朝御同一の御寺、後宇多帝御宸筆、弘法大師傳御遺書等がある、そこから東に行くと後宇多陵がある、帝御在世当時からそこを御陵に選定せられたといふ

伏見の山 は蓮華の花に似てゐるので蓮華峰寺と称し奉る、周山街道から右に約二町光孝帝の御陵がある、明治二十三年に御選定になつたもので周囲百七十七間で光孝帝陵の東方に文徳帝の御陵がある。それより御室の仁和寺境内を抜けて山路約 町を行き更に峰を下ると谷底とおぼしきところ大内山の宇多帝の御陵に参拝す、この頃より吹雪来つて山路の歩行をして極めて難儀にさせた、聞く宇多帝は藤原氏の

横暴を怒 つて御陵を山かげに御選みになつたといはれてゐる、そこから山の峰を乗り越すと堀河天皇、一条天皇の御陵が御同域にある、更に約二町山を下ると後朱雀、御冷泉、後三条の三御陵が御同域に並んでゐる。これで京都西部郊外の御陵は全部参拝を終つたわけだ、更に京都市に接して二条天皇の御陵が平安神宮の裏手にある、そこから約九町の間に花山天皇、金閣寺の側には三条天皇の御陵がまします、花山天皇から三条天皇の御陵までは約十町、二条・三条、花山の

三帝陵は ほとんど同じやうな型である、この御陵に参拝するや日が暮れ、加ふるに降雪に悩まされ今日の参拝を止めて京都に入つた、今日も山路をかけ歩くこと約十里、疲労加はりて元気とぼし



御陵をめぐって

昔姿で関の先帝祭

いまに残る赤間宮の
哀れ二つの遺風

西村特派員記

（二）

関（下関）の遊女こそ悲しけれ……

× ×

安徳天皇の御命日である四月二十三、四日には十二単にうちかけして、ひの袴をはき、檜オウギをかざして赤間宮に参拝する、関の先帝祭といつて今に七百年、その日は遠近の男女社前に雜踏して大変な賑はひである、社前で投げ捨てる女郎達のひの布がひろつたものには思はぬ幸運が恵まれるといふので命がけの奪ひ合が演ぜられ、時には人死にも出るといふ騒ぎである

× ×

その由来こそはかなけれ……平家滅亡して建禮門院に仕へて居た多くの女官、女御の上ろう達は壇の浦の浜辺に捨てられてしまつた、かつては殿上に我世の春をうたつた上ろう達は変る浮世を如何に歎いてもどうするとも出来ず、恨みは長き壇の浦のなぎさにひれ伏して泣いてゐた、関のトマ屋の主があはれと思つて拾上げたが、歌を詠じ、花をかざす外には能なき彼等にさがなきわざの出来やうはずもなく、仕方なく／＼山に登り、野にさまよふてさき誇る草花をつんでは関の港を賣り歩いた、女郎のカセギを花代といふのはこれから起つたとも言傳へられる

× ×

かくて先帝（安徳）の命日には必ず皆打ちつれて御影堂に阿伽をくみ花を捧げてきた、トマ屋は後に稲荷町に遊女屋を初め、こゝに敗残の彼女等はつひに人肉の市に落ちてしまつたのである

× ×

『関の遊女は悲しやな』……と今でも身の悲運をば三筋の糸につきぬ哀切を寄せてきた、そして命日には昔ながらの殿上の装ひをこらして赤間宮に寿永の春の夢をうたふといふ

× ×

またこの日漁師の中島組では麻の大紋つけ、立烏帽子に中啓を持ち赤間宮に参殿する古風が残つて居る、落人中島四郎太夫は逃れて市の西端王城山にかくれ、ひそかに平家の再興を計つたが、時利あらず後漁師となつてこれまた御影堂に先帝のめい福を祈りつゞけて来た、その子孫、今もなほ服を改めて参殿の風習を残してゐる

× ×

汽車に投じてなほ幾度か早鞆の瀬のあたりながむれば雪紛々として止まず、傷心の思を残しつゝ去る

（写眞は赤間宮）

御陵をめぐつて

御陵近し、雪の宿

今様沢市が語る霊験記 岡寺や中將姫の当麻寺

西村特派員記

大和御所の駅近くに女帝斉明帝陵を小高き天皇山の丘、訪ね、降つて孝昭、孝安の両帝陵を訪ねて大和南葛の御所の町にやどる、金剛や葛城の山々に、雪白く降り、吹きおろす風は膚身にしみて眠られず、古び果てた街々の夜のこがらしにさびしいアンマの笛、綿の如く疲れた身には『アンマよし』とすゝめらるゝまゝに呼び入れる、沢市ならぬ五十がらみの哀れなアンマは雪積る宿の門をホト／＼とたゝいてはいつて来た

× ×

犬の遠ぼえ、こがらし、いづこの座敷であらう物さびたウタイの声

――『たま／＼逢ひは逢ひながら互に見忘れて、たゞ泣くのみの心かな……めのと御手を引き立てゝお喜びに帰るさに、奈良の都の八重桜、さきかへる春ぞうれしき

――うたひ雲雀山中將姫の一くさりではないか、藤原豊成の娘に生れた身が、つれないまゝ、母の虐待を逃れて乳母と二人虎口を逃れて、蓮のマンダラを織りなした当麻寺、御所駅からはほど近いときく

× ×

『お旦那、わていはナ、眼こそ見えぬがお江戸にも見物に行きやしてね、西郷ドンの銅像を撫で廻しておまはりさんにドラられやしてね、それから四十七士の墓にも参りやしたが、撫でゝみると、義士の墓つてエライ小さいものやな』大変なアンマである『壺坂寺だすか、御所から訳ない所だつせ、斉明天皇の天皇山から真向ふの山がそれぢや』眼の見えぬくせになか／＼物知りである

× ×

『壺坂はんはな、西国三十三ヶ所の第六の札所や、その近くが例の道鏡が住んでゐたといふ大和岡寺の札所や、いろ／＼大和には名所や因縁話がそりや仰山ありまんね、壺坂寺でもナ、わてい撫でゝみましたが沢市が持つてゐたといふ杖が残つてゐますが、あれやほんものかいな、飛び込んだといふ裏の崖つ淵だつてあめいもんや』今様沢市の気焔は旅情のすべてをぶちこはしてしまふ『そいでも矢張り信仰やな、それ浄瑠璃の文句にも……たとひ火の中、水の底てな……』こゝでアンマは手拍子とつて壺坂霊験記を一くさりやつて聞かせた、御陵めぐりの旅のつれ／＼に今様沢市に壺坂霊験記を聞くとは、やはり大和路御陵の旅なればこそ

× ×

御所近く大和の山陵には古ふん累々たる石器時代の遺跡か多い、御陵参考地も少くない『おらの山から宝物か出た』ともつともらしく話しを持ち込んで御陵候補地と触れ廻して金もうけを仕込むといつた不届者もある、それと反対に『××どんの畑からは火の玉が出る、近寄つたらたゝられるぞ』など、人の田畑にケチをつける、御陵をめぐる旅の中にはかうした話も度々聞かされる（写眞は沢市の飛込んだかけから見た壺坂寺三重塔）

嵯峨や御室あたり

藤原、足利の専横を語る 洛西の十九陵

山本特派員記

藤原、足利の栄華の昔をしのぶには京の西がよい、西郊十九陵の大部は仁和、大覚両寺のほとりにましますし、共に真言の名寺である

◇

仁和寺は光孝帝の御願、宇多法皇の御室をこの寺に営造せられてから御室御所といはれ桜の名所である、藤原兼輔の「白雲の九重にたつ峰なれば大内山といふにぞありける」――はすべてをいひつくして居る、大内山は仁和寺の寺号、寺の後方山かげに宇多天皇の大内山陵がある、仁和寺に崩御になつたのを、その夜の中にむしろでお棺をおほひ、御火葬申したものである、その地が今の御陵である、お墓と申すものもなく塋地になつてゐる

◇

宇多帝、仁和寺にまします時菅原道眞の流さるゝを聞し召され、醍醐御所にはせつけられたが藤原[illegible]藤原氏の専横をにくませられつゝ御かくれになつたと傳へられる、山かげにもつ体ない御粗末な御陵を拝して泣かぬ者があらうか……

◇

大内山の下には宇多帝の御父光孝帝陵、文徳帝陵、右に峰つゞきに行けば、村上帝陵、左に峰を越せば一条、堀河両帝陵、そこを下れば竜安寺裏に後朱雀、後冷泉、後三条の三陵がましまず、東山時代の文化をほこる「虎の児渡し」の庭はこの竜安寺の方丈前にある

◇

「契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾世の春をすぐさん」と兼好法師が無常所をしつらへた双ヶ岡は仁和寺の前方[illegible]、かの徒然草はこの草庵で執筆したものである

◇

大覚寺は嵯峨帝の離宮、後嵯峨、亀山、後宇多三代の入御せられた由緒ある寺、世に嵯峨御所といふ、嵯峨帝陵は寺の後方嵯峨山頂にましまず、御陵前は眼界をさへぎる何ものもない、京都の東のはてから西のすみまで一望の内に収められる、遠くは淀川が一連の白布をのべたやうに見え近くは大覚寺の大小伽藍のいらか、千古の碧そのまゝの大沢池が展開する、まさに京都一の眺望である

◇

初め離宮であつたのを寺としたもので、後宇多天皇がこの寺に入らせられてから皇統二つに別れ、いはゆる大覚寺統は南北両朝一に帰し後亀山帝が三種の神器を後小松天皇に傳へられたのもこの寺、わが国史の上に最も重要な由緒を持つ寺である、嵯峨帝が三拝の礼をもつて眞写せられた般若心経はじめ歴代十数点の宸翰がある寺の東に大沢、広沢の池があり付近に後宇多陵、後亀山陵がある

◇

こゝから嵯峨へかけては斎宮の旧跡、祇王、祇女の昔を弔ふ祇王寺等、たづぬるによし、弔ふによき故跡、遺跡は数限りない（写眞は嵯峨山上陵から見た大覚寺大沢池、京都遠望）

ガラス使用

まる池の御陵美し

殉死を禁ぜられた垂仁帝
但島守の忠節

西村特派員記

清い池の中に垂仁帝陵は絵の如く浮んでゐる、松や櫻のこんもりした森にはすが〳〵しい嵐が神代ながらの響を立てゝゐた、夕陽に映えて金波銀波のさゞなみの上に数千羽のカモメが浮いてゐる姿、おもしろい松のみどりが影をおとしてゐる、――奈良西大寺の南、宝来村に在はす十一代垂仁陵の姿であつた、この美しい池を廻らすために「まる池の御陵」とも申上げる

×　×

池の東南に小さい陪塚が一つつゝましく浮いてゐる、但島守の墓である、垂仁帝不老不死の靈薬を求めらる、但島守勅命を受けて草を分け石を起し、あちらこちらの国々へとその薬を探し求めた、都をいでゝ幾星霜を経たであらう、彼はつひに「非時香菓実」を求め得て、いそぎ都に帰り着いた時には、痛はしや、帝にはすでに崩じてなし、但島守の悲しみは尽きなかつた、菓の実を陵前に捧げて泣きに泣いた、狂ひ泣いてつひに彼はその実を抱いたまゝ墓前に死んだ、その忠節に感じた後世の人但島守を御陵近くに葬つたと傳へられてゐる、今でもこの近くの村を宝来と呼ぶのは守が薬を求めた蓬莱の地にちなんだものといはれてゐる

×　×

御陵前には左近の櫻、右近の橘を植ゑてある等も、他の御陵がたゞ玉の如き石さくと柴垣に取かこまれた端正な稜形であらせられるのに比して、まことに風情多く拝せられた

×　×

帝は人も知る殉死を禁ぜられた仁帝である、「まきむく」の宮居まで殉死した人々の泣き叫ぶ声の聞こえくるのをあはれと思はれた帝はつひに殉死をとゞめられたがその仁帝の陵には忠節無二の但島守狂ひ死にの墓をみる、大和平原に夕陽赤し……（写眞は垂仁陵…中央の島）

洛東ところ〴〵

魚屋八兵衛の忠誠から
一変した御埋葬法

山本特派員

ふとん着てねたる姿の東山のほとりに冷泉帝陵がましますが、そのすぐうしろには太閤記に見ゆる後鳥羽上皇の寵姫松虫・鈴虫の塔がある、一株の枝垂櫻、二姫の靈を弔するが如く立つてゐるもあはれ

◇

清水の東四丁ばかり澁谷街道の左へ山道をのぼる。後清閑寺陵はこゝにある、極めて幽すゐ閑雅な仙境である、京都の町に居るとも思はれぬほど――こゝにまします高倉帝こそ「林間焼紅葉煖酒」の唐詩選の詩を吟じて御愛の楓樹を焼いた仕丁の罪を許された帝である。

御陵と同域に小督の局の髪塔がある、「小督の局か心ならず尼になされたる所なれば御なつかしく思召けるにや朕をば必ず清閑寺へ送り納めよ」との御遺言があつたゝめと源平盛衰記に見える

すぐうしろに六条帝陵がましまず。御陵のほど近く歌の中山に郭公亭がある。南洲と僧月照が國事を密議した遺跡である

◇

夢の浮橋を渡つて泉涌寺の境内には後堀河陵、月輪陵、後月輪陵をはじめ孝明帝陵がある、月輪陵には八十七代の四条帝をはじめ百七代後水尾帝からずつと百十九代仁孝帝までいづれも御埋葬の形式で十四尺ないし廿一尺の御石塔が並んで居るを拝した

◇

持統帝の頃からこの頃までは御歴代とも御火葬申しあげて居たのを後光明帝の時から停められ太古そのまゝの御土葬によることになつた、これには特記すべき逸話がある――

◇

当時御所の御用をつとめて居た魚屋に八兵衛といふ男があつた、尊王の念に燃えた八兵衛は玉体を御火葬申すを歎いて仙洞女院をはじめ権門勢家、泉涌寺へもいろ〳〵と申しあげた、彼の忠誠はつひにえい聞に達した、さうして御埋葬の制が布かれたのである、魚屋八兵衛の忠誠は明治になつて贈勲の光栄に浴した

◇

なほこゝに葬りまつる靈元天皇の御葬送については次の様な説話がある――靈元帝は御遺詔によって土葬にし奉らんといふを泉涌寺の僧徒等が火室に御棺を入れ奉り誦経し既に火を放たんとした――と、その時御棺しきりに鳴動し、その響き雷火砲の如く一室たちまち眞つ暗となつた

◇

その際多数の僧徒が負傷し、驚いて御埋葬申しあげたと、恐れ多いことながらこうした話もいまなほ傳へられて居る――（写眞は歌の中山のほとり清閑寺陵）

北面の御陵哀し

千載の恨を残す南朝の天子

神気みつる霊域

西村特派員記

たゞさへ哀れ深い吉野山——後醍醐帝北面の御陵へ、落花の如き雪をついて詣づ、中の千本のあたりから雪はいよ〳〵深く如意輪寺の山門は五寸余に達す

×

——吉野山みさゝぎ近くなりぬらん
散り来る花も打ちしめりつゝ
昭憲皇太后御歌

×

御陵は如意輪寺本堂の裏手、古き柏と松は相いだいて、折からの山気にヒヨウ〳〵の響を立てゝゐた、たゞ一重に取まく石の玉垣にもその正門のとびらにも延元のコケ深く蒸して、みるもはかなき有様である、御陵は実に北面す、——朕が骨はたとひ南山のコケに埋づむとも魂ぱくは常に北闕の天を望まん——と満腔の血涙をのんで崩ぜられた御心そのまゝに、南朝天子のみさゝぎは、今もなほ北闕の天に千載の恨みを残されておはします

×　×

北面の御陵はとこしなへに恨みを傳へてか事変ある毎に必ず山鳴りすると傳へられる、日清戦争が始まる前年には御陵近くの山々が時ならぬにゴウ〳〵たる山鳴りを起した、日露戦争の起つた年にも山鳴りがあつたといはれてゐる、山陽の延元陵に詣づるの詩の一篇にも『山裂けんと欲す』との句がある、今でもキコリや猟師もこの霊域の神気をおそれて近よらぬといふ

×　×

「北面の御陵」が異数である上に延元帝の神霊をまつる吉野神宮の神殿がこれまた異例な「北面作り」である、明治二十二年創立当時神殿南面論と北面論とが盛んに学者の間に論ぜられたがつひに『御陵すでに北面する以上神殿また北面すべし』との論勝を占めて外にためしない北面の神殿となるに至つた

×　×

案内した平木守部は南朝遺臣の子孫である、福住、浦壁、山口、宮崎等の遺臣と共に代々地下一統と称して御陵を守つて今日に及んでゐる、その初め逆臣等の発掘を恐れてその祖先は常に死を以て御陵の守護に当つたといふ、御陵をめぐつて全山こと〴〵く南朝の悲史哀史をつゝむ、吉野宮跡、村上義光の墓、護良親王吉野落ちの二天門、その別離の跡も雪深し——歌書よりも軍書に悲しき吉野山の風情は今更書きつゞるにも及ばず（写真は後醍醐帝陵の近く如意輪寺の塔）

官女をしのぶ姿して

千年の古陵を守る

丹波山国の後花園帝陵

山本特派員記

紅楓深し南し西し水の隈

◇

几董が高雄の紅葉をほめた句だ。嵐山と共に京都第一の絶景である。この高雄から後花園帝陵まします丹波山国村に入る。京都から七里半の山奥にある。山陰線殿田駅からも、らく北雲ヶ畑を経て祖父谷峠の険をよぢても行ける。が最も手つ取り早いのはらく西から周山街道を選ぶのがよい。

◇

山国村は往古から由緒深い土地である。それはらく西大原村八瀬が千余年にわたつて皇室と関係が深いのとよく似てゐる。——桓武帝が平安の地に都をおさだめになつた時、特にこの地に宮城御造営の御用材を命ぜられた。村人たちは無上の光栄に感激して、全村をあげて御用材を京都に送つた。

◇

以来宮廷の御用材はこの村からしば〳〵御用立したもので、今秋御大典に際しても御下命あるやに傳へられてゐる。今日桓武帝をまつる平安神宮のお祭には、毎年この村から楽師が京都にくり込む、桓武帝を徳とする村人たちのせめてもの心づくしであらう。山の中の小さい村ではあるが、一丁毎に小路があるところは京の都をまねたものか

村の女達は今でも赤い腰巻様のものを着物の上からまとつてゐる、これは宮廷の御用をうけたまはつた昔を捨てぬ村人の心掛けである

◇

かういふ関係から明治維新の際は公卿方での強硬論者西園寺公は書をつかはして村の青年たちの奮起を促した。もち論青年は起つた、隊を組んで京に馳上つた。これがいはゆる山国隊である、いづれも弓を得意としたので山国の弓戦隊ともいつた。

◇

蛤御門の合戦に奮闘し、更に肩に錦の布をつけて官軍と共に東進した。山国隊の弓は佐幕党の胆を奪つたものである。いま後花園帝陵の陵墓守長をつとめてゐる藤野卓爾氏の祖父藤野斉氏は当時山国隊の取締であつた。

◇

山国の地は太古豪族が住んで居たらしく村の前方の山々にはヅコ穴と称する古ふんが沢山ある。穴居時代の遺物か、または横穴に葬つたものか、いづれにしても豪族生活の跡がしのばれる。たゞ明智光秀兵乱の際全村を焼き払はれたゝめ的確な文献がないのは史家の深くかなしむところである。村への入口周山に光秀築城の跡がある。

桓武以来千有余年、旧態依然、そま人の手には弓づるとつて武をねる風はいまも昔も変りはない。

ガラス使用

大原の里を訪れて

◇昔ながらの大原女風俗

孤島に果て給ひし二帝陵 今に残る床しい古風

山本特派員記

一天万乗の君にして、絶海の孤島に海人たちを友として御不自由の御一生を終らせられた帝は御五方である――淡路の廃帝と申しあげた淳仁帝をはじめ、承久兵乱後の後鳥羽、順徳、土御門の三帝、保元乱後の崇徳帝である

○

後鳥羽、順徳両帝陵はらく北三里大原の里に御同域でまします、京都からざつと二里で八瀬の村、朝廷に御事ある毎に輿丁に召される八瀬の童子はこゝの村人である、更に一里の北に『めせやめせ、めせ、ゆうげの妻木早くめせ、かへるさ遠し大原の里』とうたはれた大原女の里がある、こんな衣に御所染の帯をまとひ立掛をつけ、白地の脚はん手甲をうがち、頭に染模様の手ぬぐひをかむり今も昔に変らぬ古風が存してゐるのはうれしい

○

後白河法皇がありし昔をしのばせられて夏草の茂みが末を思ひまゐらせて御幸になつた大原御幸もこの里である、両帝陵は大原勝林院のそばに拝される

○

申すまでもなく後鳥羽帝は承久の乱後隠岐の島へ遷幸せらるゝこと十七年『われこそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け』と満腔の御ゆう憤をつゝませられつゝ宝算六十を以ておかくれになつたのである、お骨は一人の僧が首にかけてこゝに葬り奉つたものである、今日は十三重の輪塔が御陵の表に立つてゐる

○

この左方に円墳がある、これが順徳帝陵である、順徳帝は佐渡に遷幸になり御入らくの御願がかなはせられず同地真野山に崩御遊ばされた

○

こゝの御陵の守部中川豊次郎氏は奉職後十年近くもなるが同氏の家は代々守部をつとめ当主豊次郎氏はま五代目に当り、先代花次郎氏は四十年間奉仕したといはれてゐる

◇猪の足跡を踏んで

――後水尾陵へ急ぐ甲班

弘文天皇の御陵に達して最後の礼拝を終つた、御陵は小さき形ばかりなる円墳におはします、瀬田に戦つて敗れたまひ自らこの山に退いて哀しき御最期を遂げられた御跡と聞く、三井の山寺は近く近江の八景がすみわたつ

三井の山陰に 弘文帝の陵

全コースを終つて 一路伊勢大廟へ

大津にて乙班 西村記者

御陵参拝旅行における最後の日は来た、甲班記者が今日こそ一挙に飛行機をかつて飛ぶの報を聞くや余は是非ともこれに先だつて **帰京せん** と決心し九日午前七時卅四分大坂をたつて先づ高槻に向ふ、大角駅長、内山本社支局長その他大坂御陵参拝会員多数の万歳を後にして卅分後には早くも高槻に着いた、矢の如く自動車を西国街道にはせて一里余摂津にたゞ一陵在します継体天皇の御陵に詣りで、はね返すが如く取つて返して次の列車に間一髪の **飛び乗り** を演じ京都に入る、待つ間も遅しと大津行列

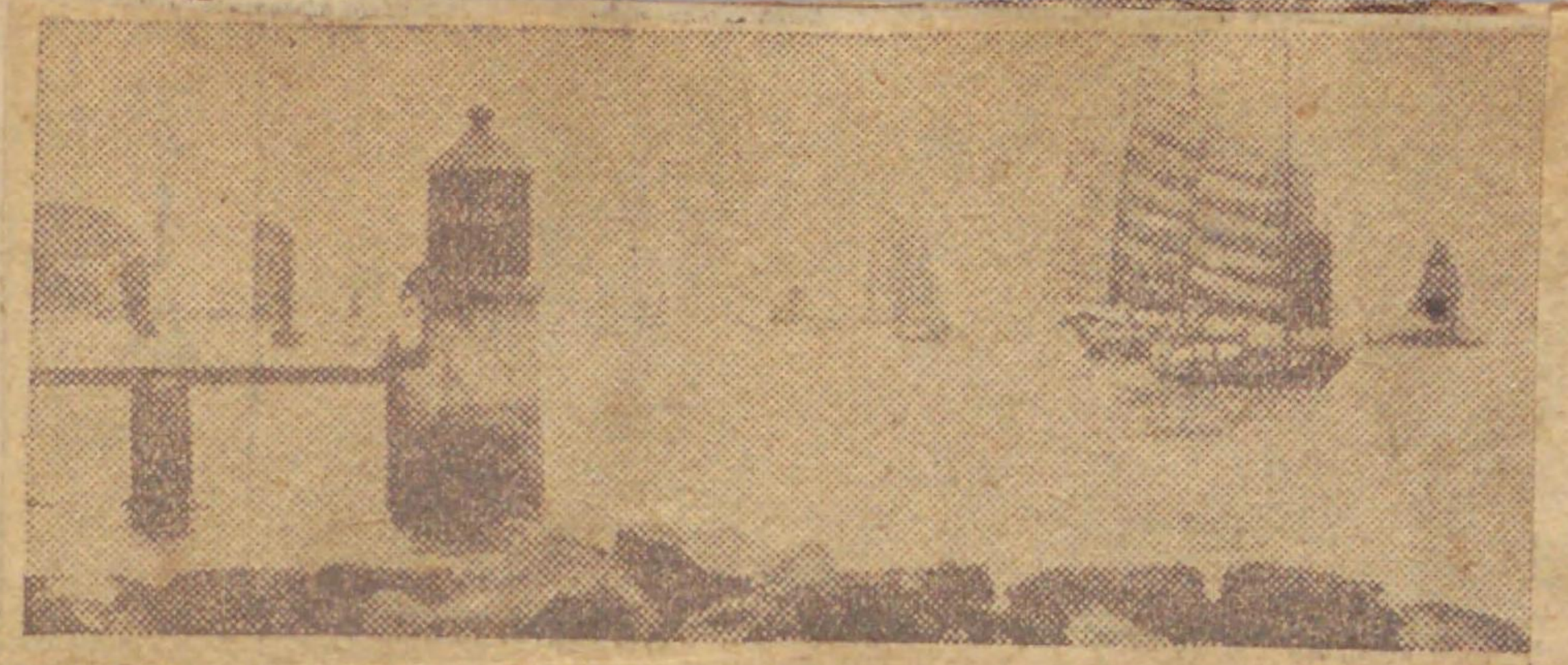
口をすぎて円城寺山門を北に午前

十時半

竜の都の安徳帝

「平家の一杯水」にも……
つきせぬ寿永の春の哀

西村特派員



いまも猶袖こそぬるれ
わだつ海の
竜のみやこの御幸思へば
昭憲皇太后御歌

× ×

五日朝九時御裳川の橋畔に立つて早鞆の瀬の流れを見詰むれば、壇の浦の浪風荒れて空くらく筑紫おろしに飛雪紛々として哀切はすでに迫る、二位の尼の袖にいだかれて海底深く八歳のいとけなき春秋を沈ませられた安徳帝の哀史は比類なき史上のあはれである、その御遺がいは永久に見出されず、入水の後五年、帝のなきがらをたづね求めて浪々十年、つひに御母建礼門院の御乳母少将の局は帝のめい福をこの地に求めた、後白河法皇勅して御影堂を建立され、後天皇社と称して明治に至つたが、維新の三傑木戸孝允、その粗略なるを愁歎して計画する所あり、明治大帝勅許して阿弥陀寺陵となるに至つた

× ×

陵は赤間宮境内、紅石山のほとり眼下には壇の浦を望む、その隣には知盛、盛経、有盛、資盛、経盛、敦盛、清経等十二人の平家一門の公達及び二位の尼の墓立ち並ぶ、青石にコケ深くして一抱へもなき小石を二列に並べてある、ツバキの老樹、老根晝も暗くおほふて折からの飛雪サン／＼と乱れて飛ぶ、悲しや寿永の春の四月二十三日、遂に九郎判官のために一門こと／＼く鬼と化して、徒らに下関名物平家ガニの面貌を賣る、御裳川のたもとには

今ぞ知る御裳川の流には
浪の底にも都ありとは

悲涙をしぼる禅尼の辞世が綴られてあるし、その入水今はのきはに御一代の鳥羽絵びよう風もとくに管主松浦氏の厚意によつて拝した、末期の清水を求めたといふ「平家の一杯水」も七百年前の面影を語つてゐた

× ×

狩野光信が物したといふ安徳天皇が、世に全盛を誇りし平家が木曾の山塞に追ひ落とされてたちまちに愁風到る処の野に満つる西の国へ翠華揺々として落ち給ふ様、さては壇の浦の決戦に到るまでのあわたゞしくもはかなき御生がいを描いてゐる

× ×

その心ばかりなる御陵に至つては一本の青松を生えて一つ葉に土を覆ふた円墳に過ぎず、こゝにもまた雪みぞれを交へて注ぐ、小門の海峡も悲雪深くして見え分かず、一説には、帝の小さき御遺がいは浪の間に／＼漂ふてこの小門の岸辺に打ち上げられたを平家の落人中島某が厚く葬つたとも傳へらる、恩しゆう二つながら遠く七百余年の夢と化して、今、詣づる身には哀情旅愁惨として迫るばかりであつた（写眞は壇の浦）

永に御陵安かれ

賊徒を走らす護陵團

田圃に拝す天武持統の御陵

西村特派員

ダン／＼畑の、なだらかな岡の上に、こんもりした森が見える、冬の陽がホロ／＼とこぼれてくる、霜どけのドロ／＼道が大根畑やネギ畑の間を縫ふて山頂まで続いてゐる、天武天皇とその皇后であつた持統天皇の御陵が一域に合葬されてある姿である、奈良県高市郡坂合村のたんぼの中——昔は堂々たる山陵であつたであらうが、今ではその周囲は農夫がスキクワを入れてゐる有様で、昔は外濠でゝもあつたであらうその跡にも、麦の芽がのびてゐる

× ×

阿不幾の山陵記には、八角の石壇が五重も積み重ねられ、南面に石門があつたと誌されてゐるが、今では八角のおもかげなどは残つて居ない

× ×

持統帝崩ぜらるゝや、畏くも遺詔されて喪をあぐる事もなく、御葬儀の如きもほんのおしるしに執り行はれた、御遺がいは聖天子として初めての火葬に付せられた、山頂の嵐に焼いて粉にした骨粉を蒔き散らせゝ遺詔になつた淳和帝のことなども思ひいだされる

× ×

かくもつゝましやかに執り行はれた御陵が文暦二年の頃には凶賊押しかけて『石門を切り開いて金銀珠玉を奪ひとる、京中の諸人陵中に入つて御骨を拝し奉る』と阿不幾の山陵記には記してある、歎かはしい話だが、大和におはす奈良市街の開化陵も、卅年前までは子供達の遊び場所であつたといふ、その濠ではヒゴイを釣り、その広場は鬼ごつこで踏み荒されてゐたといふ、奈良佐紀におはす成務帝の御陵にも、明治の初め、佐紀村の佐吉といふ凶賊が暗夜に乗じて御陵を発掘して埋づめられてある朱を盗み出した、村民これを発見して寄つてたかつてつひにリンチを行つたといふ話もある、降つて大正四年の頃にも徒党をくんで御朱を盗み出さうとして、これまた霊域を護る村民達に撃退されたといふ

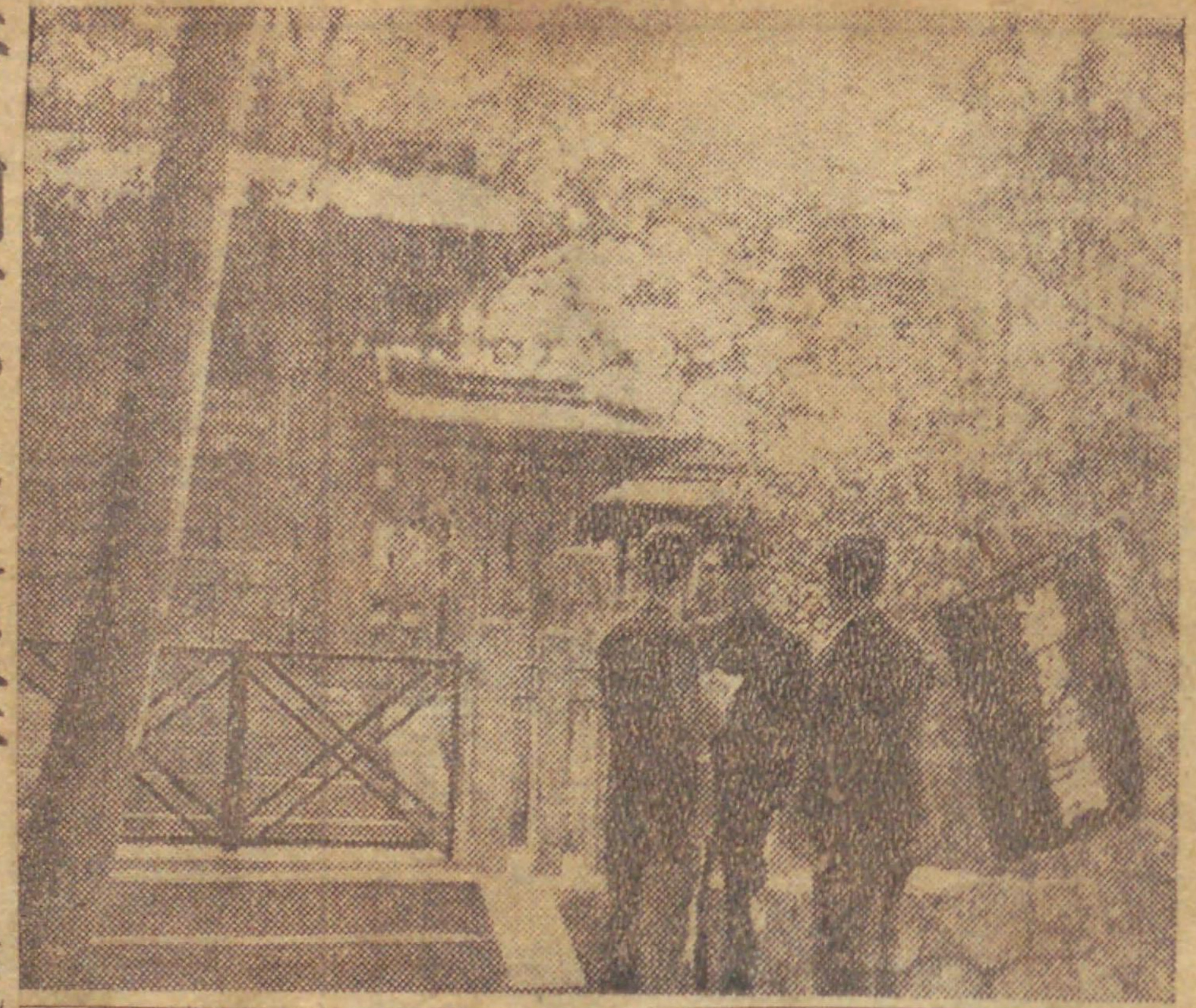
皇陵時に荒されんとした事もあるが、常に身を挺して当る護陵團の努力がその霊域の危きを救つて来たものである（写眞は畑の中に仰ぐ天武、持統陵）

ガラス使用

清和源氏発祥の地

千余年の昔から傳は
嫁入りの奇風

山本特派員記



保津川の急流に沿ふて二里、廓通ふ山の小道をのぼりつめたところが水尾の里である、この村里のどんづまり御陵川の清流を渡れば、清和帝陵が山の上にまします、橋から五町の参道である、清和源氏は帝から生れ、水尾村こそは源家発祥の地、四囲こと〴〵く山にかこまれたゆうすいの地である

◇

清和帝はしば〳〵御信仰の愛宕山に行幸せられた、ある臨幸のみぎり、その裏山のこの地に道をとられ日暮れて水尾の円覚寺に一旬ほど御滞在になつた、それが縁となつてこの地に御陵を定めさせられたと傳へらる、また御悩御静養のためであつたとの説もある、いづれにしても山間景勝の地である、今なほ気おのづから静まるを覚えしむる地、千年の昔は想像に難くない

◇

聖上臨幸のみぎり村の乙女たちは帝の御側に近く奉仕し遠く都をはなれてわびしく住まはせ給ふ帝にかしづき奉りえい慮を御慰め申しあげた、その時乙女たちは京の宮女たちの宮仕する緋の袴をまねて前垂——といふよりも三幅の腰衣風の赤い布を腰にまいた、緋の染料のない村では、生木綿をハリの木の皮を以て染めてもの心づくしとして奉仕した、朱色の腰ごろもをみづから緋の袴といつてゐたものである、帝はこの村人たちの赤誠あふるゝ歓待をいとゞ御満足に思召され、御帰らくの後『朕なき跡は水尾の地に葬れ』と御遺詔あつて都に崩ぜられた

◇

村の婦女はいまも当時の宮仕の遺風をついで山へ行く時も野に出る時も緋の袴（俗に赤前垂といふ）を必ずつける、殊に清和帝と関係の深い愛宕山へシキミを賣りに行く時は、晴れの緋の袴をつけて行く、白脚はんに緋の袴の乙女姿のみやびたる古への宮仕の姫君たちを思はするものである、この風はこの村の尊い歴史を語る誇りとして緋の袴は欠くその出来ぬ嫁入道具となつてゐる、丁度他の村々でタンス、長持が必要であると同様に重要品の一つとなつてゐる、この緋の袴をつけねば——おぞろで無作法だ——と村の人たちは口をそろへて笑ふとは里人の直話である何と尊い遺風ではありませぬか

◇

この村の交通機関は小型の車だけ

一里下つた鵜飼浜から保津川の急たんにしぶきをあびて嵯峨へ下るのである、余は山里深く清和帝水尾山上陵を拝し、この尊い遺風を目のあたりに見て特に印象深いものがあつた（写眞は清和天皇御陵）

受難の四十年

誠忠楠公の首塚を前に
観心寺の鐘永へに悲し檜尾陵

西村特派員記

これまた南朝の遺跡——河内国川上村観心寺の奥に、後村上帝の檜尾の陵は、古色そう然たる杉木立の森の中にしづまります、後醍醐帝の第七の皇子、義良親王は振るはぬ南朝のために、お年十二の頃から北畠顕家にまもられて奥州のはてに轉戦され、ある時はつれなき風に難破して船は伊豆篠島に打ち砕かれるなど、四十年の間一日も安からぬ受難の日をつひにこの地に終らせられたのである、ことに正平三年逆臣師直が吉野の行宮を襲ふた折の如き、一天万乗の至尊がみづから甲ちゆうに身をかためて荒ぶる馬にむちをあげてかたき賊徒のかこみを突き血路をひらいて金剛山に入り、轉じてこの地観心寺の行宮に入らせられたのである

×　×

御陵から観心寺本堂を右にとつて、数十壇の石段を登りつめた山峡の奥、チョロ〳〵とわきくる石清水の忍び音も何かを語る、耳をすませばほの暗き木立の奥にホロ〳〵とフクロウさへないてゐる、金堂のシュミ壇にかきならす観経の声がシンと静まつた神秘の空気を打ちふるはす

その陵前右手の木立には楠公の首塚がある、討死の後、尊氏が河内の遺族に送り届けたのを一党が厚くこの地に埋めたといふ、コケ蒸して六百年の星霜、墓は心ばかりなる塚の上に石を二つばかり積みかさねたに過ぎず、楠公の父正康、子なきをなげいて観心寺多聞天に祈つて一子を得たといはれて居る、八歳のときから中院に寝起して院主滝覚を師として万年不易の忠魂をすでにこの地に鍛練したといふ、いよ〳〵死を決して湊川に向ふ道恩賜の愛染明王及びはい刀を中院に送り届けた、夫人阿久の方は一子正行が四条畷の露と消えるや、またこの所に髪をおろして尼となり英霊を長く弔らつたといふ、南朝君臣と切つても切れぬ因縁にむすばれて観心寺の鐘はとこしなくに鳴りひゞく

×　×

なほ目下問題となれる長慶帝の御陵は全国に数十となくその候補地が散在してゐる始末だが、観心寺本門の右にもその行在所の遺跡が残つてゐる、あるひは由緒深きこの地が長慶帝の御陵に決定されはしないかといふ説も甚だ有力視されてゐる

×　×

道は河内長野駅から山路一里半、深山ゆう谷のおもむきは歩一歩に迫つて遊子の心はすでに神秘の気につゝまれてしまふ（写眞は観心寺境内、御陵はこの裏手）

ガラス使用

断腸の思を御製に

土御門帝陵にしのぶ哀史

淳和帝御風葬の跡

山本特派員記

駒とめてひのくま川にやすらへば、都こひしき秋風ぞふく

○

ゆくすえをしらぬ我身のたぐゐかな、こほりにむせぶ谷川の水

○

ゆきとまる里をわが世と思へども、なほ恋しきは都なりけり

◇

土御門天皇の御製である、暴逆なる臣下のために、心ならずも遠く辺すうの地に遷幸のまゝおかくれになつた帝ほど御いたはしい方はない、御陵を拝すれば思はず腸を断つものがある

◇

土御門帝は承久の乱後、北条義時のため御父後鳥羽上皇、皇弟順徳帝が隠岐、佐渡の孤島に遷幸さるゝをひとり京にとゞまるに忍びず

と申されて土佐に遷られ、後阿波に移り住まはせ、塩たく撫養い海近き里に崩ぜられた、夢まどらかな何日とてなく、わびしい御住まひをわづかに三十一文字に事よせてお過ごしになつたのである、言々悉く御涙をさそふ御製のみである――

昔よりうき世の中ときゝしかどけふは我身のためにぞありける

○

つらしとて人をうらみんゆえぞなき、わが心なる世をばいとはで

しづかなる心のうちも久方の空にくまなき月や知るらん

○

秋の色を送り迎へて、雲の上になれにし月も物わすれすな

◇

今の金原御陵は八角形のお塚で松と杉が主木となつてゐる、慶応元年に修理されたものである、当時このあたり一帯は伏見宮家領であつたものと見え御陵守・辞令も同宮家から出てゐる、現守部湯川氏の祖父甚左衛門氏が拝命した時の辞令は今もなほ存してゐる、美濃紙に墨痕鮮やかに書かれてゐる

（原文のまゝ）

口　達

金原御陵守戸原藤三郎代

甚左衛門

切に存じ疎略有之間敷大切先役から相談可申候但御用の節帯刀にて相勤可申候右当巳正月から来る酉十二月まで中五ヶ年同名前御預けに相成候間山陵御掃除その外勤向大もち論村中に対し威光ヶ間敷儀

義堅く有之間敷候事

巳正月

伏見宮御方

御役所印

といふのである、もつと珍しい

お墨付にあると思つた

◇

山の端に沿ふ北に三里、淳和帝陵まします大原野村に達する沿道[illegible]はうつそうたる竹林続きである、京名物の筍はこのあたりから東京までも出て来る、大原野村、二千百余尺の高峰の頂きに淳和陵を拝したのは雪の朝であつた、この御陵はわが國でたつた一つの御風葬の陵である、御遺詔とはいへ、万乗の君が仙骨を風のまに〳〵山上にまき散らし申すことは臣下として忍び得なかつたことであらう、中納言藤原吉野等がいろ〳〵にお諫め申したが吉野の意見は通らなかつた、やむなく御遺勅通り御火葬の上、御骨は粉に砕いて西山の峰に散じ奉つたものである

◇

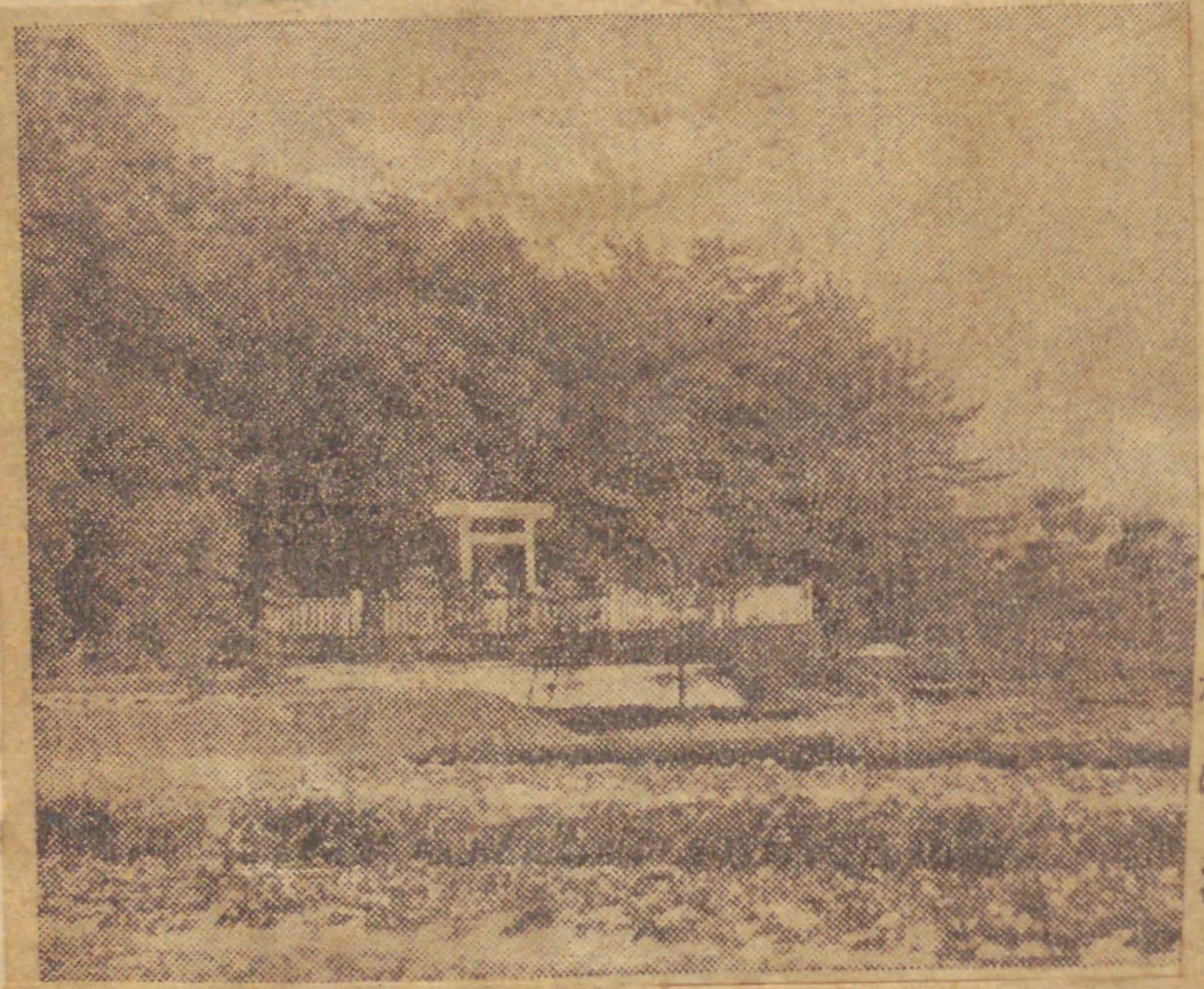
慶応元年戸田大和守が御修築申し上げるまでは数個の石におほはれ御陵と申すも畏れ多いほどであつた、今は、石さくを廻らし楕円形な御兆域も定まり、小さいながらも松が繁つてゐる（写真は土御門陵）

昔ながらの情操

村人の『下草刈』と『湟水下賜』

世界第一の仁徳陵

西村特派員



小さい御陵の多い中に山かとまがふ大陵も少くない、世界第一といはれる仁徳帝陵は実に十四万坪、他には類のない三重の大堀をめぐらす、次は應神帝陵の約九万坪・履中帝陵、景行、崇神等皆堂々たる陵であつた、広漠たる平原の中に、うつそうたる森にかこまれた大陵が、ピラミッドの如くそゝり立つ荘厳の姿は仰ぎ見るからに気持がよい、ことに夕焼けの陽をうけて森の緑一時にかゞやき渡つて、白木の鳥居と石の玉さくが白金の如く光る趣は何にたとへやうもない

× ×

仁徳帝は一名「大山陵」ともいふ、この大陵の工事中、一匹の鹿がむらがる数万の人夫の中に飛び出した、百舌鳥がたちまち鹿の耳に飛び込んだため鹿はその場で死んだ、この地を「百舌鳥の耳原」の御陵といふのは、この古い傳説による、ある人の計算によれば、この大山陵をきづくために延人員百八十万人を要したらうと推測してゐる、御陵は三段にきづいた前方後円式、周囲は実に廿五町十間に及び小山の如き陪塚が十数個もあつて、珠数つながりに御陵を取まいて居る

× ×

次に大きい應神帝陵にしてもあんまり大きい工事であつたゝめか、一部はなほ工事未完成の「甲斐の谷」といふのがある、工事と聞いて駈けつけんとした甲斐の人夫達が途中で戦乱にあつたゝめ、とう〳〵その分だけは取り残されたといはれてゐる

× ×

かゝる大陵になると日々の掃除も大変なもので、多くは付近住民達が毎年春秋を期して「下草刈」を奉仕する、御域内の松の手入、下草の刈込等よつてたかつて賑やかに奉仕するのは村人達の楽しい年中行事の一つである、また山陵には多少にかゝはらず濠をめぐらしてあるが、昔から「御湟水下賜」といつて、日照りのみぎりには堤を切つてお濠の水は存分に付近百姓達の田畑を[illegible]といふ程うるほすのであつた、下草刈といひ、湟水下賜といひ、御陵と付近の村民達の間は切つても切れぬ美しい連鎖が続けられてきたものである（写真は大和の原にそゝり立つ景行帝の大陵）

ガラス使用

が　る　諺　○　過　神　飲　物　○　る　ら　又　１　る

如何にして精力を増進す可きか
學理の蘊奥を極むるといふも巨万の富
を得るといふも、前人未知の器械を發明
するといふも、皆是畢竟するに精力の賜
物で無いといふことは無い。精力衰へた
らんには如何に智慧のある人も何等爲す
事無くして終るのみである。然らば如何
にして精力を増進す可きかと云ふに、
身の精力を増す食物を攝り且之を強壯
らしめる一種の藥物を服まねばならぬ
如何なる食物が精力を増すか――之
種々の滋養物を攝るのであるが、殊に
方肝油ドロップスを常用するのである
此成分中には最も消化吸收し易い脂肪
る肝油に有機鐵有機燐有機性石灰。レ

●波瀾多き好古翁の一生

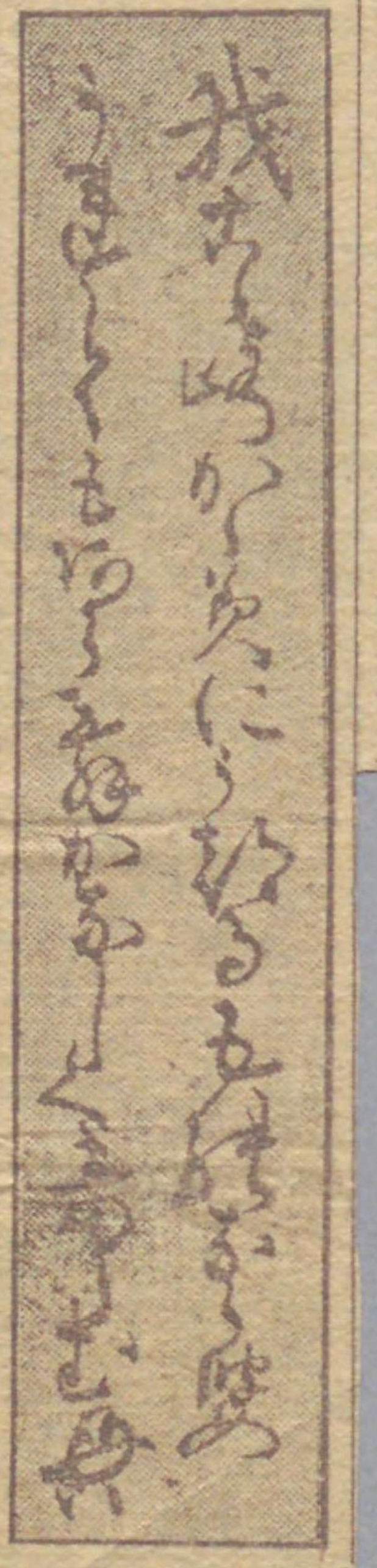
一丁稚、小僧、騎兵隊 遂に神道界の第一人一

夕刊所報、十七日日本大學で演說中絶命した藤岡好古翁（七三）は頗る波瀾の多い生涯を送つた人である、父は淺田元吉氏、淺草に生れて幼時侠客近江屋安兵衛に養はれ、同家が衰へてから藏前の札差の丁稚になつたが

▲腕白な爲 追出され八歳の時八王子在來迎寺の小僧に遣られた併し生來武張つた遊びを好み、お經の稽古が厭で堪まらぬので十四歳の時『坊主は厭だから武士になる……』と書置して江戸に出たけれども、坊主頭の爲取り合はれず、止むなく又寺に歸つた、當時師の融仙上人は甲斐御嶽山金櫻神社の別當を勤め、山に學者が多く居たので、國學を内藤有守に、漢學を增澤隼人に學び僅十日で

▲大學中庸 を覺え舌を卷かせた事もある、安政二年再び江戸に出で、醫師小野蘭山の家塾に學びつゝ、天下の亂に血を湧かして居たが、遂に浦和に走つて青山六郎から金子二兩と劍術道具を借り、同志中井三彌と武者修業に廻つた、歸來幕府の騎兵隊となり、大政奉還の折は二條城の警固に任じ、伏見の戰ひには敵の陣頭に錦旗の飜へるを見、慶喜公を說いて恭順の意を表せしめた、其後洋行を思ひ立つたが養母扶養の爲果さず

▲夜店商人 に迄成り下り、次で下野佐野在赤見村の國學泰斗堀秀成翁の門を叩き塾生の賄方を引受けつゝ餘暇古典學を研鑽した、明治三年東京に出でゝ福羽美靜等と交り、同年七月神祇官に出仕し宣教少講義、教導職伊勢神宮禰宜を經、大教院詰教正となり又久邇宮朝彦親王殿下の御代理として神道を忌む熊本縣下に出張し、命賭けで巡教した、西南役後神宮主典に任ぜられ、神宮教院に轉じ明治三十年神宮教管長となつたが、後所思あつて解散し神宮奉齋會を組織して其長となり、又神部署東京支署長東京神職會々長をも勤め、數年前



▲功に依り 正六位に叙せられた和歌に巧に又圍碁を能くし、先年伏見宮殿下御前で慶喜公と對局を命ぜられた事もある

△家人の驚ろき 十七日午後青山北町七の二の藤岡邸を訪ふと今しも自動車で翁の遺骸を運び入れた所で夫人岩子（五四）が泣き崩れ居る樣も傷ましく、門下知人親戚等が集まつて伊勢の神部署に居る嗣子好春氏（三七）氏へ電報を打つやら上を下への混雜であつた、家人は『十六日も別に變つた事なく日比谷大神宮へ出勤しました、十七日朝は丁度好春氏夫人と共に上京中の令孫を連れて近所を散歩し、それから慈惠醫院へ講演に行き、續いて日本大學へ廻つたのです、平常腦の病氣というては無く、酒は好きですが澤山はやりません、此方へ移つてからは閑靜で身體も達者でしたが、丸で夢のやうです』と語り、長女藤子（三四）の嫁ぎ居る森安醫學士初め、詰合つた人人總て夢現の體であつたのは見る目も氣の毒だつた

挟み込み物

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

ガラス使用

マラリヤ薬（キナ）規那ノ木ヨリ

（モルヒネ）阿片〃〃

ロ喘息薬（エフエドリン）麻黄〃〃

（カンフル）樟脳

リウマチス（シノメニン）アホツヽラ　防已

（デトロトキシン）フク毒　田原博士

（アドレナリン）副腎　高峰博士

心臓病を治す漢方藥公開

榮養を旺んにすることが肝要

全國民間靈藥研究所　長井康城

小酒井不木の小説『人工心臓』の中に『およそ心臓程大切な機關はない、人事不省に陷つても心臓の動いてゐる間は、その人は死んだのではない。若し心臓が停止した時直ぐに鋼鐵製の頑丈な人工心臓におき替へて

外部 からエネルギーを與へ、喞筒の作用を起させ、血液を全身に送ることが出來れば、死んだ人も生き返らすことが出來る。人間が病氣で危篤な時に必ずするカンフルの注射は、いふまでもなく强心劑即ち心臓の働きを强くする藥劑である。どんな病氣に罹つても、最後は心臓を犯されるために死ぬものである。心臓さへ丈夫なら、治らぬ病氣は治らぬまゝにその生命を保つことが出來るのであるから、醫學者は病原菌の穿鑿より、一歩進んで鋼鐵製の人工心臓の製作に工夫を凝らすべきである』と述べてゐるが、これを讀んでも人體に取つて心臓が如何に大切であるかを知ることが出來る。

心臓の病氣にも急性あり慢性ありその種類も多いが、多くは

心臓 辨膜症である。これにかゝると心臓部の左の乳房の處が幾分か腫れ上る。胸の動きがたかまり顔や手足は鬱血のために黑ずんだ蒼い厭やな色になり、時々腫れが來る。病が進むと、心臓へ手を當るとゴロ／＼と音がし、咳が出たり、胸が狹められるやうな痛みがあつたりする。呼吸も幾分苦しく、殊に歩行や運動や勞働をすると非常に苦しく、時にめまひを起して卒倒することもある。これはリウマチス、關節炎、酒、タバコの中毒、痛風、血管硬化、腎臓炎等がその原因となるもので、養生法としては食事の時間を一定し、間食を避けて胃腸を强くし、滋養物を攝つて榮養を充分にし、病氣でない部分の心臓が多く働いて、働きの惡い部分が補ふやうにすることが第一である。第二に動きをなるべく高めないやう、心身の安靜が肝要である。漢方の秘藥としては次のものがある。以上の養生法を行ひ

連服 したらその効は驚くべきものがある。動きのはげしいものには茯苓二匁、白朮、香附子、牡蠣各一匁二分、桂枝、乾姜、藁防、

甘草各六分、以上八味八匁を一日分に腫れのひどいものは香附子二匁四分、茯苓二匁一分、縮砂蘇子、甘草各九分、沈香六分、以上を一日量として各五合の水で約半分にせんじつめ一日三回食後二時間後に分服する。（世田谷若林六二）

糖尿病全治の漢方藥公開

九十パーセントの治病成績

全國民間靈藥研究所　長井康城

先日の本紙に糖尿病は漢方で手輕になほるといふ話が出てゐたが、いはゆるその漢方の藥なるものについては、一言も記してゐない、同病に惱む患者はこのみだしに引きつけられて

必ず讀んで 見るであらうが、結局これでは失望する外はない、自分は多年趣味の上から、民間藥や漢方藥の研究をしてゐるが他に生活の道があるので、その研究は得るに隨つて、これを公開してゐる、糖尿病の漢方秘藥として同患者に服用せしめ、九十パーセントの治病成績を上げてゐる處方は次の通りである。

括蔞根、人參、茯苓、知母、甘草各四匁、石膏八匁、大豆十粒以上八味を水二合で一合に煎じつめ、更にこれを二度煎じ替へ、その都度水を增し

れてゐる。

煎じる時間 を長くする、一日三度、食後一時間後に用ひると、七日から十日位で大抵の難病も全治する。なほ本病患者には軟かく炊いた玄米飯、蕪菁、人參、林檎、牛乳、味噌汁、油揚、キャベツ、胡瓜、海藻、川魚などがよく、殊に小豆と板昆布とを充分よく煮て、これに南瓜か里芋を入れ、鹽辛く味付けしたものは、本病の特効食とさ

ガラス使用

東山天皇月輪陵　同

乙　西村記者
甲　山本記者

輝やかしき
年を祝ひて

日本最初の壮挙
歴代御陵参拝競争

百二十の聖域を漏れなく
甲乙両班必勝を期して
新春四日帝都を出発

歴代百二十の御陵を二分し
◇甲班は……山城、丹波、淡路、讃岐の各陵
◇乙班は……武蔵、大和、河内、和泉、摂津、近江、長門の各陵

松浦侯長英を援く　高野長英

江戸沖崎屋の囲を以て高野長英松浦侯の援を受け松浦肥前守客分
松浦見朴かこと長英鳴滝塾の舎より長崎平戸藩邸内に移居（分離術）二巻
の翻訳に着手す

あ
あとかよ已ぬ　あかち（あかち知らぬ果か、かよふくる、沖の小島はさやけども　波静かなる

松浦かた　ほ、

朱買臣のかた、
牧笑茂木左馬之助殿に
もぎ木にも花咲く時のあるものを、何と左山蹊に、朽ちや果つべき
吉地の寓に墨染の袖したる句に
降り立ちて、、、、、

奈良市油坂町
聖武天皇佐保山南陵　奈良縣添上郡佐保村法蓮
元明天皇奈保山東陵　奈良市奈良坂町養老ヶ峰
元正天皇奈保山西陵　奈良市奈良坂町弁財天山
平城天皇梅楊陵　奈良縣生駒郡都跡村佐紀
稱德（孝謙）天皇[illegible]野陵　奈良縣生駒郡平城村山陵
成務天皇狭城盾列池後陵　奈良縣生駒郡平城村山陵
安康天皇菅原伏見西陵　奈良縣生駒郡伏見村宝来
垂仁天皇菅原伏見東陵　奈良縣生駒郡都跡村尼辻
光仁天皇田原東陵　奈良縣添上郡田原村日笠
崇神天皇山辺道勾岡上陵　奈良縣磯城郡柳本町
景行天皇山辺道上陵　奈良縣磯城郡柳本町
舒明天皇押坂内陵　奈良縣磯城郡城島村忍坂
崇峻天皇倉梯岡上陵　奈良縣磯城郡多武峰倉橋
綏靖天皇桃花鳥田丘上陵　奈良縣高市郡白橿村
神武天皇畝傍山東北陵　奈良縣高市郡白橿村
安寧天皇畝傍山西南御陰井上陵　奈良縣高市郡白橿村
懿徳天皇畝傍山南纖沙溪上陵

孝安天皇玉手丘上陵　奈良縣南葛城郡掖上村玉手
孝昭天皇掖上博多山陵　奈良縣南葛城郡三室村博多山
後醍醐天皇塔尾陵　奈良縣吉野郡吉野村塔尾
顕宗天皇傍丘磐坏丘南陵　奈良縣北葛城郡下田村
武烈天皇傍丘磐坏丘北陵　奈良縣北葛城郡志津美村
孝霊天皇片丘馬坂陵　奈良縣北葛城郡王寺村王寺

一、摂津国　十六陵

允恭天皇恵我長野北陵　大坂府南河内郡道明寺
雄略天皇丹比高鷲原陵　大坂府南河内郡高鷲村
仲哀天皇恵我長野西陵　大坂府南河内郡古市村城
仁賢天皇埴生坂本陵　大阪府南河内郡藤井寺村
應神天皇恵我藻伏岡陵　大阪府南河内郡古市町
清寧天皇河内坂門原陵　大阪府南河内郡西浦村
安閑天皇古市高屋丘陵　大阪府南河内郡古市村城
孝徳天皇大阪磯長陵　大阪府南河内郡山田村上野山
推古天皇大阪磯長陵　大阪府南河内郡山田村
用明天皇河内磯長原陵　大阪府南河内郡磯長村

奈良縣高市郡白橿村
宣化天皇身狭桃花鳥坂上陵　奈良縣高市郡白橿村鳥屋
孝元天皇剣池島上陵　奈良縣高市郡白橿村石川
欽明天皇檜隈坂合陵　奈良縣高市郡坂合村平田
天武天皇檜隈大内陵　奈良縣高市郡高市村野口
持統天皇檜隈大内陵　奈良縣高市郡高市村野口
文武天皇御陵　奈良縣高市郡坂合村栗原
斉明天皇越智崗上陵　奈良縣高市郡越智岡村車木

一、武藏国　一陵

大正天皇多摩陵　東京府南多摩郡横山村

一、長門国　一陵

安徳天皇阿弥陀陵　下関市阿弥陀寺町

一、大和国　三十一陵

開化天皇春日率川坂上陵

敏達天皇河内磯長中尾陵　大阪府南河内郡磯長村太子
後村上天皇檜尾陵　大阪府南河内郡川上村寺元
反正天皇百舌鳥耳原北陵　大坂府堺市向井町
仁徳天皇百舌鳥耳原中陵　大坂府堺市舳松村
履中天皇百舌鳥耳原南陵　大坂府泉北郡神谷村上石津
継体天皇三島藍野陵　大坂府三島郡三島村

一、近江国　一陵

弘文天皇長等山前陵　大津市別所南滋賀

乙班

一、山城国　六十七陵

（御歴代順）

天智天皇山科陵　宇治郡山科村
桓武天皇柏原陵　紀伊郡堀内村
嵯峨天皇嵯峨山上陵葛野郡嵯峨村
淳和天皇大原野西嶺上陵　乙訓郡大原野村
仁明天皇深草陵　紀伊郡深草村
文徳天皇田邑陵　葛野郡大秦村
清和天皇水尾山陵　葛野郡嵯峨村
陽成天皇神楽岡東陵　上京区浄土寺町
光孝天皇後田邑陵　葛野郡花園村
宇多天皇大内山陵　同
醍醐天皇後山科陵　宇治郡醍醐村
朱雀天皇醍醐陵　同
村上天皇村上陵　葛野郡花園村
冷泉天皇櫻本陵　上京区鹿ヶ谷町
円融天皇後村上陵　葛野郡花園村
花山天皇紙屋上陵　同郡衣笠村
一条天皇円融寺北陵　同郡花園村
三条天皇北山陵　同郡衣笠村
後一条天皇菩提樹院陵　上京区吉田町
後朱雀天皇円乗寺陵葛野郡花園村
後冷泉天皇円教寺陵　同
後三条天皇円宗寺陵　同
白河天皇成菩提院陵紀伊郡竹田村
堀河天皇後円教寺陵葛野郡花園村
鳥羽天皇安楽寿院陵紀伊郡竹田村
近衛天皇安楽寿院南陵　同
後白河天皇法住寺陵　下京区三十三間堂廻

二条天皇香隆寺陵　葛野郡衣笠村
六条天皇清閑寺陵下京区清閑寺町
高倉天皇後清閑寺陵　同
後鳥羽天皇大原陵　愛宕郡大原村
土御門天皇金原陵乙訓郡海印寺村
順徳天皇大原陵　愛宕郡大原村
仲恭天皇九条陵　紀伊郡深草村
後堀河天皇観音寺陵　下京区今熊野町
四条天皇月輪陵　同
後嵯峨天皇嵯峨南陵葛野郡嵯峨村
後深草天皇深草北陵紀伊郡深草村
亀山天皇亀山陵　葛野郡嵯峨村
後宇多天皇蓮華峯寺陵　同
伏見天皇深草北陵　紀伊郡深草村
後伏見天皇深草北陵　同
後二条天皇北白河陵愛宕郡白河村
花園天皇十楽院上陵　上京区粟田口町
後亀山天皇嵯峨小倉陵　葛野郡嵯峨村
後小松天皇深草北陵紀伊郡深草村
称光天皇深草北陵　同
後土御門天皇深草北陵　同
後柏原天皇深草北陵　同
後奈良天皇深草北陵　同
正親町天皇深草北陵　同
後陽成天皇深草北陵　同
後水尾天皇月輪陵下京区今熊野町
明正天皇月輪陵　同
後光明天皇月輪陵　同
後西天皇月輪陵　同
霊元天皇月輪陵　同
東山天皇月輪陵　同

中御門天皇月輪陵　同
櫻町天皇月輪陵　同
桃園天皇月輪陵　同
後櫻町天皇月輪陵　同
後桃園天皇月輪陵　同
光格天皇後月輪陵　同
仁孝天皇後月輪陵　同
孝明天皇後月輪東山陵　同
明治天皇伏見桃山陵紀伊郡堀内村

一、丹波国　一陵

後花園天皇後山国陵　北桑田郡山国村

一、淡路国　一陵

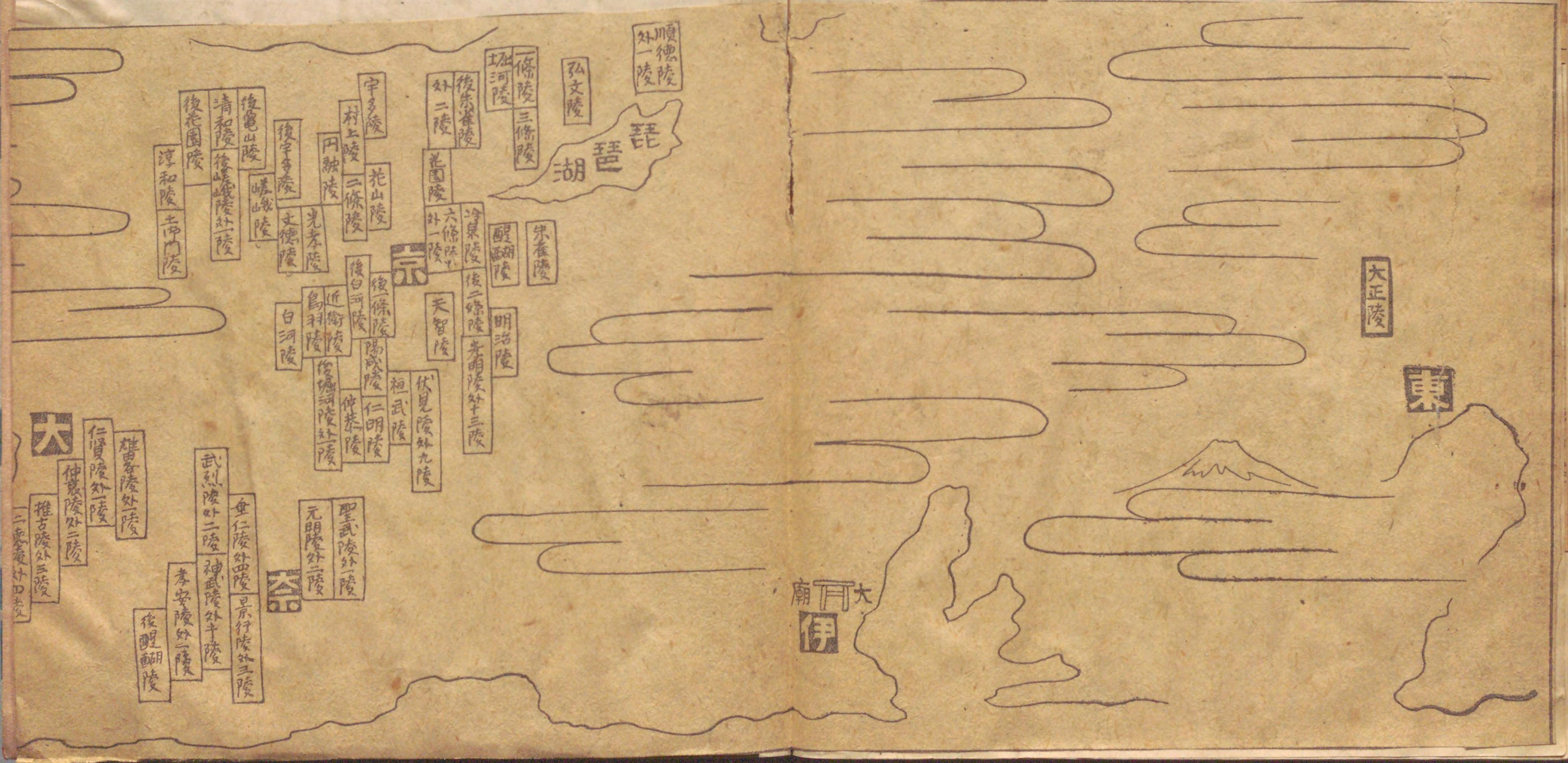
淳仁天皇淡路陵　三原郡賀集村

一、讃岐国　一陵

崇徳院天皇白峰陵　綾歌郡松山村

甲班

ガラス使用

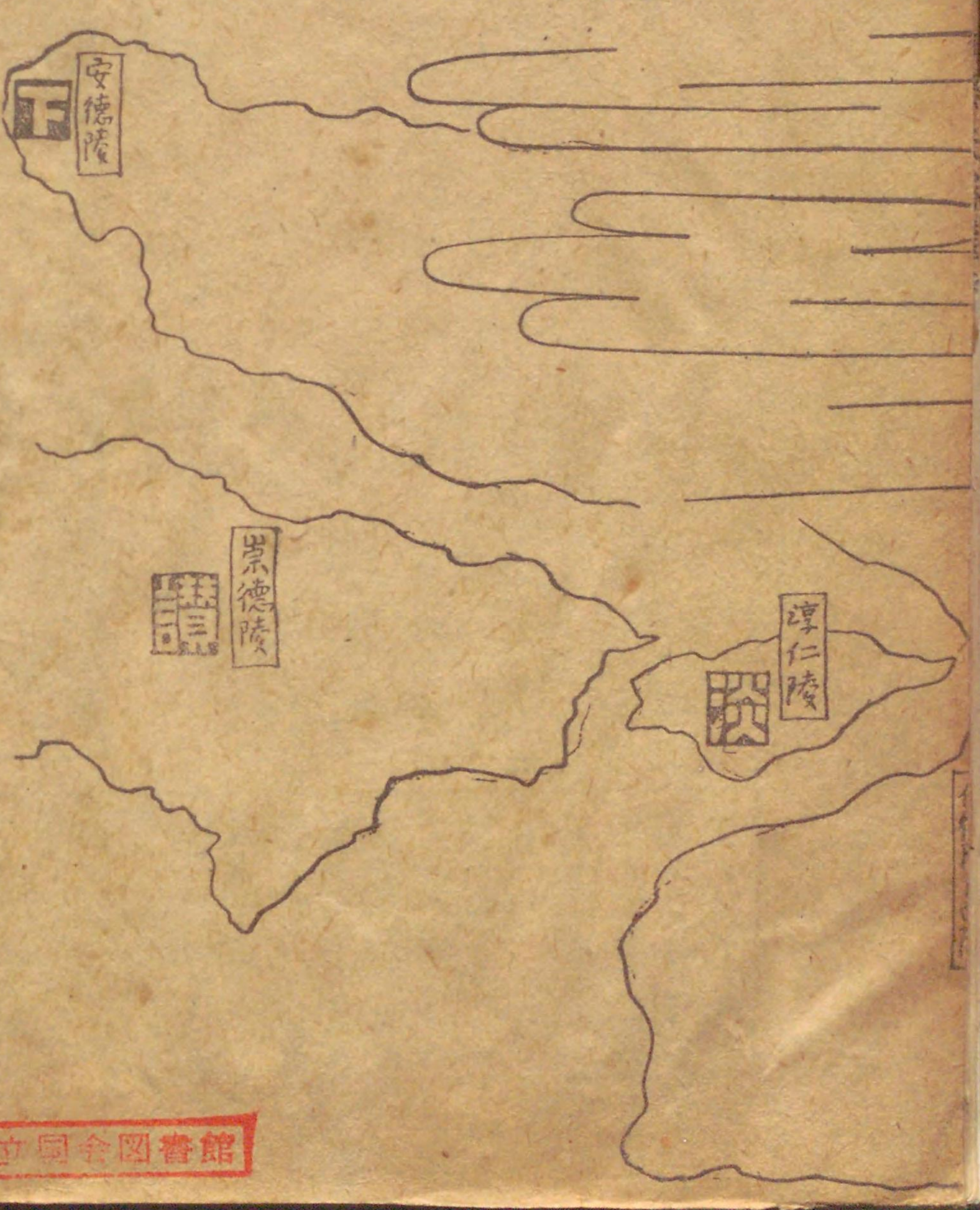

大正陵
東
大廟
伊
琵琶湖
順徳陵外一陵
弘文陵
一條陵
三條陵
堀河陵
後朱雀陵
外二陵
朱雀陵
醍醐陵
冷泉陵
六條陵外一陵
花園陵
明治陵
後二條陵
孝明陵外十三陵
天智陵
伏見陵外九陵
桓武陵
京
宇多陵
村上陵
円融陵
花山陵
二條陵
後宇多陵
嵯峨山陵
文徳陵
光孝陵
後一條陵
後白河陵
近衛陵
鳥羽陵
白河陵
陽成陵
仁明陵
仲恭陵
後堀河陵外一陵
後亀山陵
清和陵
後嵯峨陵外一陵
後花園陵
淳和陵
土御門陵
大
雄略陵外一陵
仁賢陵外一陵
仲哀陵外二陵
推古陵外三陵
二條天皇陵外四陵
奈
聖武陵外一陵
元明陵外二陵
垂仁陵外四陵
景行陵外三陵
武烈陵外二陵
神武陵外十陵
孝安陵外二陵
後醍醐陵

IMPERIAL JAPANESE POST
弐銭
2

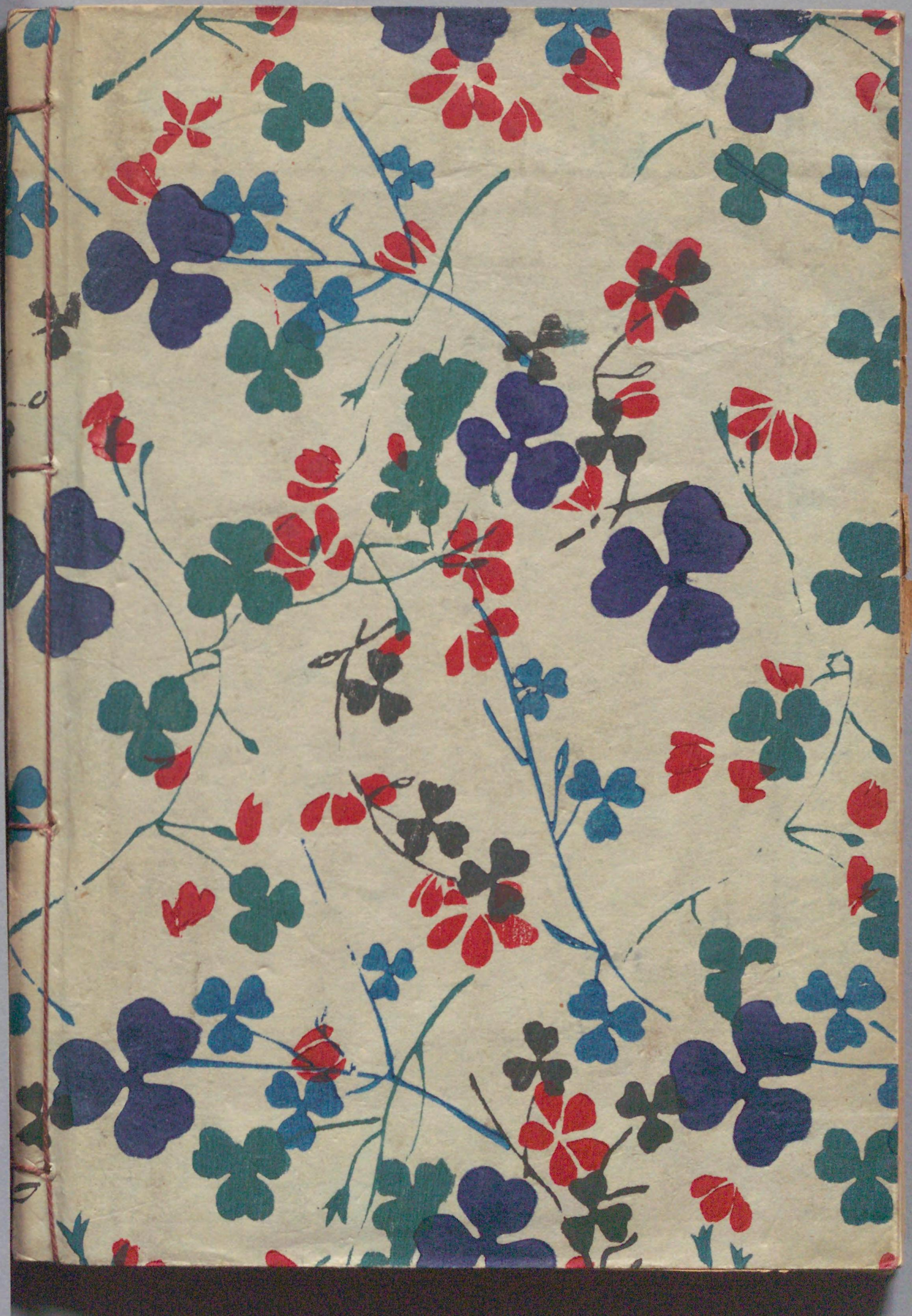
御陵参拝コース一覧

◇図中　東…東京、伊…伊勢、京…京都、奈…奈良、大…大坂、淡…淡路、讃…讃岐、下　下関の略

◇御陵の輪郭で、太枠は既に参拝済みのもの


下
安徳陵
讃
崇徳陵
淡
淳仁陵

国立国会図書館



ガラス使用